# 1111001111



二月號

Pensoj flugas trans la`land-limon
THE SENRYU ZASSHI

No. 369

3 月本社句会·

背貯花無 兼 神 題 広金束経

川柳雜誌社主催

### 本社二月句会

四 ち 非

題 引

(当日発表

3 3

富

淡

舟

選

呈 句 席

費 題 話

力

天 清 麻

位

10

不

朽

洞

营

水

白

子 郎

4:

\* 事 合各題天位 Ti. 紫香·淡舟·賀峯·与呂志·白 愛論·東洋男·潮花·一三夫 + 四 公兼題

水

投句のみの方は郵券三十円同封(メ切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

雑 誌 社 句 会

部

]1]

柳

電

・住

吉

67)

六

0

八

場 日

所

明

(電話団九二六〇

初

一月 光

七

日

(金) 午

後

六

時

心者が毎月ふえてきたことはありがたいことです。

がする。それを思うと句会は休めません。

句

会は道場です。

ŀ

v

1

ニン

がを怠っては

息

3

九

題

n 取 3 = (市電下 句

須 麻 崎 生 路 H 郎

選

菊 沢 小 松 園 秋 選 選

大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前 寺町又は日本橋三 丁目 車

阪・名古屋・伊勢を結ぶ・・・・

名古屋 阪一宇治山田 1時間54分 宇治山田

名古屋発 8.00 16.00 8.40 16.40 7.40 15.40 9.00 18.00 12.00 20.00 14.00 9.40 18.40 8.40 17.40 12.40 20 40 11.40 19.40 14.40 13.40



マートでのもい 着心地のもい

0.S.K.

了是公公一局

大坂商店

川柳雜誌社特製 投句用 あなたの机上に

(五〇枚綴) 三〇円 料(無分八 ゼヒ一册! 柳 円

1 送

バックナンバー御入用の 方は往復ハガキでお問合 わせ下さい

川柳雜誌社

女の一生

新聞も読まないで

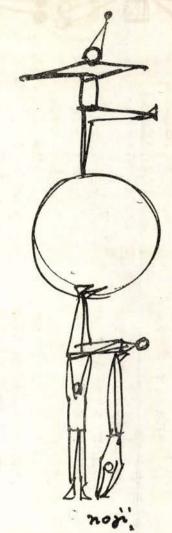
再婚が伝えられていたが姿消ゆ

晩年の日記の空白寒う見る

風も電燈をつけて雰囲気を愉しみ

すこしよろめきなさいと老夫人からかわれ

バンとミルクの食事へ 記者を待たすなり



月

目

### 不 朽 洞 何 帖

余所の奥さんを 鑑賞してるうちに着き

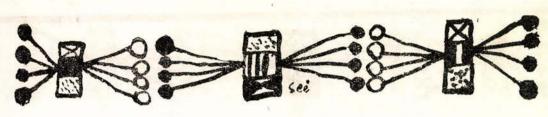
横綱がもろいたとえになりそうだ

生 路 郎

麻

- 一九五八・二月

### 不朽洞会から..... 源川全柳国 朝 名 当世あらかると…… 新川柳鑑賞…… 同川 -路集「空」場」……中村九呂平選…(≦1) 淀川支部と香林氏…… 正しい日本語を…… 訪ねての会を 川柳書の暴騰 川不柳朽 愛初 集界 筆 筆「髭」… 洞 柳鑑 賞..... 行物 の 句……..須崎 春 朝脚と の二 + 四 時 石川棄郎・蛭子省二……(1\*) レ 北川春巢選・(二) 麻生葭乃選…(元) 麻生路郎選…(四) 隆文•一鶴…(14) 富土野鞍馬…(六) 水谷 次 ……(川) 好郎…(吴) 清生…(長) 竹荘…(三) 水堂…(三) 路郎…(10) 路郎…(三) 潮花…(运) 亜鈍…(10) 路郎…(詞) 文庫…(六) 大八…(九) 路以即 家…(心



制服の紺とは別な裏の色 豊中市 戶 田 古 方

ぜいたくな肩が凝ったと春三日 喰べさしの折パチンコで忘れて来 大阪市 īli 没 食

ふりむけば地声にもどるバスガール

子

介阪市

Œ

本

水

客

見

华

西宮市 岩 本 少 久 志

緋の蹴出しよろめきそうなマダムなり 東京よさようなら財和掏られて来 冬来りなば女和服に サンデーと週刊朝日で軽い旅 若い妓の手も握りたい耳順なり 父さんもそうだったよと母のぐ 社長だとわかった電話改まり 足袋ぬがしてと女酔うており

女事務を笑わす話まだ続き 畳替え終り公舎も春になり 寝顔見りゃヒスル等とは思われず

ホノルル市

內

藤

赏

郎

岡惚れが頼れもせぬ酒を助け

人も雲も足早くなる暮の街 れ話もう煙草へは火もつけず

男五男父のバリカン板につき

不景気のお蔭女給等寄って酌ぎ インテリ女給又身の上を訊かれて居

ハンストはとても向かない子の育ち 東京都 宫 田 不

斯かる世に畳は肘で作るもの 窮屈に子と寝る日々の有難さ 昨日と昨日の記憶老夫婦

まだ生きているのに誰れも来なくなり 不自由なく飲める役所が辞められず じり貧になっても切変え出来ぬ祖母 米子市 鴨 美

鶏飼うて妥協許さぬさがという 通り名はパパさんと云う楽屋 物忘れする母となり母笑う 振返る息の白さで別れてき 火鉢にも手が出ぬ程に気が滅 軸掛けて立って坐って人を待ち 食卓へ遠慮のいらぬ人にされ 道草を食うたと再婚思うとき 少しずつ缺けた茶碗へみな達者 大阪市 П 入り 丸 尾 潮

伊豆へ行く羽織は京へ染めに出 新婚はたのしふたりで三味も弾き 送られる傘はナンバの灯で別れ 大阪市 北 111

結核を病んでて脳溢血で死に

ラー ブルマナーへ母ちゃんが気を使い 奈良県 尾 崎 方

Œ

持っていそうにない足音が追越した 悠久を破るが如し人工衛星 U 看護婦にだき上げられる程痩せて マンスグレイいつのまにやらひからび to

笑 縁談がほっとかれてる十二月 どうかなるだろうどうかなるだろうと 十二月とがった声へふり向かず 十二月空威張して見たくなり 岡山県 浜 久 十二月 米

雄

安物をあさるに師走の強い風 灯がついたとこで密談鳧をつけ 長命の家に生れて依存主義 雑巾が乾ききっている孤独 人が買うのを見に行った年の暮 岡山市 逸 灯

味自慢板場の替ったことを伏せ スタイルにとんじゃくもせず妻は老 ちんどん屋ひょうげたとこを子に見られ んだ薬のそれは広告さぎだっ 大阪市 近 12 部 Vt 否 林

捆

の内税が気になる米俵 年はこれで行きたい初明 1)

出雲市

尼

統

Ż

助

花

妻にもう魅力が失せたとも言えず 初霰寝酒をうまいものにする 大阪市 水

谷

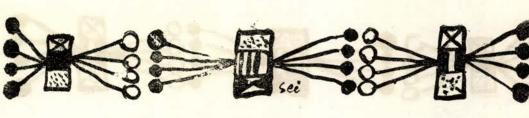
竹

荘

春

巢

क्त 田 主: 井 堂



世話すればおっちょこちょいと云う世 三男高校を出る 間

亡るよりましさと文科へ踏切らせ ターミナル予報と違うなりで来る

西宮市 沢

葉

政変の予感女将は知って居る 史

ボスらしく地方紙に写真堂々と

まだ若い気らし半長靴など履い ソーツと開けたので盗人かと思い 西 無

鬼

米へ女の力見直され

通勤の服装かわる月曜日 尼崎市 小 林 文 月

会社でも宅でも負うた子に教えられ

急停車させて別嬪ツンと行く ボーナスはいつでんねとサイラ焼く 大阪市 富 岡 淡

舟

えらいこっちゃ中味忘れた御仏前 防府市 長 野 井

蛙

痴話喧嘩隣りはラジオ切ってきき 年の瀬が妻の多弁で乗り切られ 出かけようと思うに掛取り坐り込み 演習のようには火の手納まらず

バ

カバカと女は型の如くすね

小説の恋には遠い台所 苦労したことを他人にくどくどと 妬きもちも他人事だからおかしくて 大阪府 四 村 梨

呉 市 林 野 甦 光

帯メの位置へ女の線見つけ

空壜があったと人が騒ぎ出

バスとめて牛悠然と草を喰み 文化の日がなんだいおいらは炭焼さ 直 原 七

小心者の嘘へまんまと引懸り 汚職記事の派手に我が子も名を並べ 縁談の話で行けば酒も出し

元旦の逢瀬を約している二人 いわと判然り云った未亡人

子守唄今日はこの家の児を背負い 鳥取市 河 村

H

満

猛犬に注意御慶を門ドで待つ 人買いを父が居らないほど探

初明り母の祈りがまだ続き 岡山県 福 島

元日を初発でさめたガード下 三カ日だけは夫婦も顔が合い

大阪市 西 U わ を

十二月よろめく暇もなかりけり オイと云う友に工学博士あり

決裂の余憤ドアーを肩で押し 子のミットボーナス日まで待たされる 岡山市 服 部 + 九

平

の思い落葉が好きなわけでな 尼崎市 長 谷 川

Ξ

司

\$

里

冬オーバー去年の皺のまま着られ エキストラ今日は緑の背広着て 兵庫県 岩

草

右

面 Ш ささやかな贅沢毎晩風呂をたて 代読の方が上手に式詞よみ 大阪市

名士の仲人花嫁の名を忘れ

足

7

春

雄

人前で妻いたわれる年となり

熊本県

有

芳

仙

慈善鍋彼女が二人分を入れ 防空壕へ人住みついた灯がともり 頓服より効いたようです医者の 大雪になりお百度が効く予感 今此処に五万あればと差向い 嘘

下関市 石 Ш 侃 流 洞

**黎列のしんがり笑ってるのもまじり** H 寒月ヘビルが鋭くのしかかり ためる気になった決意を壁にはり 曜大工妻の銚子でいたわられ

鉄

児

大阪市 安 岡 珊 枝 郎

其知恵を置いても欲しい人も逝 小さい誇り信号を良く守り 3

田 季

旧姓でまだまだ稼ぐ女事務 広島県 111 替

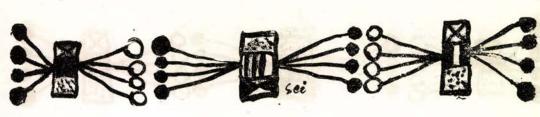
新婚のもたれ合ってる旅つづく

大阪市 III 本 葉 光

十二月紙屑籠が小いさいぞ 散髪屋出て北風に走らされ

泣き虫の男に髭が生えてい 倉敷市 村 容

意地捨てた夫は凡夫の相となり いにしえの住人の姿とめし泉



後添二年遺族扶助料ころげこみ 底はそこ澄んで流れる冬の川

下を見て暮らせと妻を押えとき 石川県 那 谷

満員車押すなよ見舞に行く卵 醒めて見りゃいつしか膝でない 枕

加賀市 野 村 味

4

駅前のやど屋が なさぬ仲回り道してはかながり 一軒灯を点し 大阪市 村

水

堂

ボー 気に入らぬ養子に一家支えられ 怒ってる証拠に養子無口なり ナスをみんな渡して家で酔

倉敷市

水

谷

谷

水

これっきり来ぬ気か保険屋まくしたて 婿哀れしつけられたる犬に似て 数の子はどうしましょうと淋しがり 自 転車に乗っても妓うちまたで

倉敷市 椙 原

善

妬くよりはついて行くのが得と知り 岡山県

田

村

藤

波

叱られてから爪先の音になり 子を金に見積ってみる年の暮れ

田

夜

潮

倉敷市

松

村

方

古

豪語して採決すればすっぽぬけ 不意に出て不意に引っ込むいい女 逃げて尚轢き殺される文化なり 死んだ子へ生者必滅とは憎し 転宅が好きではないが又追われ 岡山県 岡

> 食えぬのが居て面白しクラス会 嘘のない暮しがしたい年が明け ネ厄へ心ゆくまで飲むつもり

光

郎

左派に居てもらい物にも念を押 岡山県

ス 転勤の表札こんどは海の風 ピッツにまで香水をふっかけて

特進伍長煤けて既に幾年ぞ おろおろしただけじゃ云い訳けにもならず

算数のノートの隅に鈴之助 会計さんだけが背広でかしこまり

補助椅子の方へ淚の眼を反らし

夜汽車いま風に乗ってる音になり もうじきにお正月ねと威かされ 大阪市

雨になり御用じまいを濡れてゆき 運転手社長をのせる腕になり

千切大根良く刻む娘に刻めぬ娘 自分で引いた線の中で誰れも死に 甘辛衝ただ見るだけのところなり

失業の足へ枯葉がついて舞い 復職へストーブ番を当てがわれ 妻君の敬称変わる浮き沈み 所望され枯らす課長と思えども

家中を連れる財布の軽いこと 倉敷市

藤

井

春

H

つぎ屋が俺等の股

へ米を入れ

日 井 -林 坊 豊作 へ俵担げね老淋

岡山市

津

田

麦

太

楼

玉島市

河豚 鷹の爪つるし軒物の冬温く 町政を動かす後家のあだっぽ 料 理せと物屋ほど皿並

本 田 惠 \_ 朗 保釈金さすが汚職の金まわ 商魂と体の詩魂折り合わず

大阪市 鍋 瓢

> 清貧になれ恩人の背がかがみ 年玉が少なく見送っては呉れず

米子市

西

雄

離婚談意地の強さを否定せず

吹田市

橋

本

\$

男

京都市 松 JII 杜: 的

後 藤 梅 志

盛者必滅元使用人に家を売り

新築へまだ嫁の来てないらしい 子沢山妻の強気に支えられ 看護婦の夢はやっぱり結婚よ

iti

高

临

雄

声

島根県 旅 井

明

朗

男女共学へ修身あって欲し 置土産汚職になると困ります かしこまる借着へ酌が寄ってくる

岡山県 永 松 東 岸

子

逝く人もあり十二月暮れかかり 税金を詐欺にかかった気で払 元日に生んだ卵のあたたかく 大学へまでも附添いついて行き 十一月もう借りたとこないかいな 入院の人形抱いた娘をつれて

小説のように女に近づけず 倉敷市 素 身 郎

喧嘩して身近な人に感じだし 師走だというに見合もせにやならず 泣声はよその児だった箸をとり 信じてはいるが一言いって欲し 大阪市 JII [n]

みおつくしならぬ先から床に入 独房はもっと静かなとこだろか

大阪市 +

悟

村の和へ駐在さんが口を出し 癌と聞かされて湯吞みを取り落 汚職の行方傍聴席で見まもらん よろめいた恋を支える金が要り

お手前のお薄もどこか京の味 前借も出来ず連休来てしまい 人間として選挙権ない陛下

大阪市

伊

達

堰

子

十円の羽子板駄菓子屋にも師走

親の目に試してみたしてス応募 妻や子がせがんでくれぬのも寂 大阪市 不二田 =

肩もってくれたは金のない連中 しまい風呂ちよっと泳いでみたくなり サンドイッチマンたまには空を見給えな あれだけのきりようで民生委にかかり

ナスの度に再入社がぼやき 名古屋市 長 尾 越

鳥

ボー

宇部市 津 秋 六

上役の子 勝って来たので叱り 神戸市 野 村 初 市 花 義理なども忘れみとりにねむくなる

うちのばあさんなどと云われてるとも知らず

捧げたい心師走の風に鳴る

落ぶれて逢いたがらぬも女にて

老の新春和漢朗詠繙いて

П 忙しい云えば役所はそれでよし

貧乏も楽し夫がよろめかず 大阪市 金

秋

ボーナス日嘱託

一人忘れられ

勝手に見て買えと古本屋は坐り 五千円釣りを案じた程は出 ず

心

保釈金積んでぬけぬけ湯に浸り

気骨ある教師へ辛い点がつき

西宮市

菱

田

満

座込みまでしたのをパチンコで取

られ

つき合で来てより河豚を忘れ兼ね

**蟇孤独わずらわし世をすね** 山鳩の塒へ時間厳守する 如

電撃の様に破産の通 知来る 東京都

賽銭を沿いそこねた人の波 一の酉にて

ツンドクの落丁を子に教えられ 大阪府

教授老いもう受け売りを自責せず 孤児院で食うて渡欧と勲章と 重役の健忘むしろ畏敬され

夫

許す気で居るに貴方の感悪し 停年が何めでたいと云いたそう 辻

アチャコのような親にあまえたし 道徳を教える人が座りこみ 金と暇之がわたしをよろめかせ

良縁を虫待つ蜘蛛のように待ち 石川県 中 松 恒

雄

女中から夫婦の仲の良さが洩れ 岡山県 野 × П 美

舟

げんかしといてバナナ分けて食べ

岡山県 池 井 田 古 文

茶

石 居 高 志

失言はたかが女と云うただけ

金のないロマンスグレーて意味ない

わ

微臭い布団を重ねさす寒さ

早 JII 清

若い日の苦労を子の子に又教え

岡山県

池

E

知

惠

美

生 焚火から焚火へ噂もちあるき ズカズカと猫新刊を汚しに来

お元日朝日を拝む母が居り 東西の下宿の子から来る無心

大阪市 橋 高 黨 風 7

圭

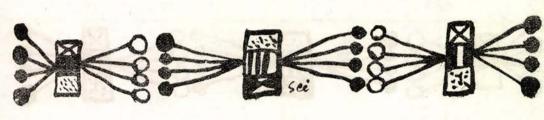
水

銀行で酔うた同志が掛けてゆき 傘さしてやってる方が刑事なり 荒寺にいっ そ淋しい萩の花 煙草屋をおちよくる様な五千円 作家老いて観念だけの恋を書き 丼池のてんやわんやの中で老け 旅の雨宿屋の傘は少し漏 横丁の夕日の中の紙芝居 銭湯の開くのを待つも松の内 + 列車の中で迎えた初日 の出

もう湯気が立たなくなった母の膳 神戸市

小 浜

牧



大阪市

Ш

晃

某月某日税吏のメモの怖しさ

下関市 中 村 九 呂

| 雲脂をおこして事務所ひま

小唄より 師匠を見たい弟子が来る 山口県 处 田 ほ

仲違い女のことですとも言えず 大阪市 本 蕗

児

良縁と云われた結果がこれかいな 愚痴りつつ魚の骨もとってくれ 十二月こんなとこにも赤旗が

買え買えと云って女房に叱られた 散歩道シスターボーイにドキッとし 高校のアベック親として眺め 元旦は良いな妻まで酔うている

結局は金が借りたい長ばなし 悪夢未だ巷にギター弾く白衣 一合で酔う父になり淋しけれ

釜ヶ崎風景

死ぬ程の恋がしたいと妻言えり

ストッキングの中から千円札を出し 凍 死体無慙や服を剝がれとり 鳥取県 中

腹 恋人へ風邪マスクしたまんま逢 立てる性あわれなり経を読む

名古屋市

野

田

念

数の子の買えぬ正月またも来た守銭奴の浮気算盤して好め 愛してと云うのに 銭奴の浮気算盤して始め 一晩中歩き

> 平 11 電気具の話 へ姑ほっとかれ

平凡"を囲んで女工笑いあい

仲 E ん た <

72 流感も顔を揃えた月給日 この艶で腹まで腐ってい たり 2 ゴ

ts

流感よ借金取の方へ行け 平田市 久 家 代 仕

男

吉日のもう泣きべそでない姿 谷底へ丸太転げた音を追い

大阪市 本

省

=

駅までの五分が遠い分譲地

戶

村

集金にくらしの巾を見すかされ 七五三蛇は寸にして唇を塗 1)

守口市 大

谷

月

都

宇宙時代僕は人生うたうのさ 汗臭い男と銀河で隣合い 剃刀のような男の青い髭

舟 近

同

詠

松山市 H 伍

健

その

中で一番若いのが主任

かき船の入口せまく女連れ 二人共明治生れの保証人 ご神酒はおしめり程についでくれ お土産の菓子殿様の紋をつけ 長野県 峰

蛙

眠

子

停年へ持病の募り目立つ老い 分讓地我 惚気まできか が家の工事だけ遅れ せ役得つけ上り

たどんまだ昔の姿そのまんま 和歌山市 秋 月 宏

力

\*

経済力検討をして産むと決 煙草喫う姉に一家を支えられ テレビまであるのに集金三回 H

金髪に子供も染めて玩具にし がら空の車内も八頭身は立ち パチンコの予定終了吾がサイフ ケメケやイデディデデもめしの種 大阪市 今治市 石 田 野 沐 文 庫

味で売るおでん叱られ乍ら喰べ 貞操でない労働を売ると云う 女ごころ金の力がよろめかせ いんぎん無礼名刺ばかりが御会葬 沢 暁

交番が 乳母車子の言う方へ押せぬ用 人形の髪を梳くのも女の子 笑って見送る程の酔 今治市 月 原 宵

明

騙されたのに出所まで待つ女 課長補佐になって外した袖カ 宿題を沢山出して教師スト

新児童ヴァイオリン・サークル

アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地 TEL306 バン

児

西宮市仁川町五丁目七番地 くるみ幼稚 袁

教室新設については新児童ヴァイオリン・ サークル生動教室へ御相談下さい TEL638 バン甲

岡山市

林

葵二丘



# かると

# 東 野

# よろめき族

校長さんから、こんな電話がかか ってきた。 さるフランス帰りの洋裁学校の

が、 英、仏、アメリカでの社会風潮な にお詳しいおたくさんから…。 いんでしょうか、ご商売柄その点 どを、カンタンにどうぞ」 めきの後に来るもの』というテー マで対談をしてくれとのことです 明日民放のさる時間に『よろ 一体どういう風に答えたらい

手に作り出したシロモノでござん こんなケッタイな現象は、ジャナ 俗の時間的な話題にすぎません、 に浮いた湯垢みたいなもんで、世 きとか挽歌族なんてものは、 のその場限りのあわてものが勝 リズムという、おっちょこちょ 私はそのご相談に対し、よろめ 湯舟

さよりも、フランス帰りのニュー としたその先生が、外回りばかり さい、と答えておいた。よろめき どざんすで、軽くイナしておきな イことを発見した。 に詳しくて、中身にはとんとウト モードのデザインを追う、ちゃん 語によろめくそのマダムのおかし す、どんとお尻をすえて私は私で

# デラックス族

代』とある。 を出せ = 一題して "デラックス時 に燕尾服、白手袋の強盗が、"金 な絵が眼についた。シルクハット ニュースタイルといえば、こん

千五百円とある。内訳はペチョー 円 と下着一式の値段がしめて七万四 ト六万円、ブラジアー四千五百 デラックス・レディーは、なん コルセット一万円とある。

ろう。 れにはまだパンテイが入ってな てどうしようっていうコンタンだ い。一体こんな装束を身にまとっ

じられなかった。いろけより食い け時代の、意欲的な程のよさ。う 現実の事態の中では、ほとんど感 等、不公平の平等というマルクス ちのくたぶれた女房殿だって二言 ってふり返えられてくる。食衣平 目にはこういう。 ていた。貧富の差が、そこには 主義の実せんに程近い様相を示し べ、軍服の世が一しおの感慨をも それを思うと、そのかみのモン

「なんでも着て歩けた時代が嬉

るがための犯罪は、刑罰とて軽か で首をふる。食わんがため、生き 左様、私はこれだけには無条件

貧のテイ観によるものか。 代の中の拙者は拙者なりの安易な がしくうつるのも、これは造花時 こみそうだ。いずれにしても塩た は、わが身のヒヶ目ヒクツにおち クス時代と人間、このテーマにと てもらいたいものである。デラッ れた女房の古モンベが、時にはす つおいつすれば、しょせんそれ ス時代の虚飾の罪は刑重に比例し

大

八

# 工口本族

なった。

から不自由はして 長や、面のいいド ら、女や性には頭 いない。そこに ン・ファン連な

くなさそうで、手 は、エロ本なぞの れだけのもんにち にしてもそれはそ 入りこむ余地は全

が、一回り七万四千円のデラック った。それでいいんである。ところ がいない。ところが、古本屋のいう 色本に大胆奔放、きらびやかに、か る。かくして彼等は、エロ本に、好 た何をかいわんや。現実の限界が のお仕着せ女房ときては、われま は求め得てもそれは、古タクアン 志や肉体上の魅力のケッ乏。女体 きであろう。経済的不如意や、意 はまことに深刻極るものというべ お客の側にすれば、その点、そこ 心や肉体のウサを晴らすのであ つきると必然反動的な夢がひろが つリアルに展開するその素材に、

ラリーマン風のお客さんですな」 本を一番よく買うのは、実直なサ 私はこの言葉に、一瞬ジーンと さる古本屋の主人いわく「エロ

酒にハツラツたる顔付で、昂然ワ

イセツをひけらかす人々に私はふ

に皆さんは気がつきませんか。安

性の飢えに行悩む非力な庶民の姿

性で処理することを知らぬ、この る。性の多元的な欲求を、自由な知

女遊びにうつつを抜かす金持社

一時の下親類にも送り と涙ぐましい人生をカンズル。

屋前松 阪 1



話 (75)三九 四〇八八四四 番番 橋

## 麻 生 郎

名ふだがかかっていた。 る。その部屋に鶴の間という 湯の宿も鶴の間と云う老夫 温泉宿に老夫婦が泊ってい 「四六五 それ

い部屋の名であろうと感じた のである。 に鶴の間とはなんとふさわし だけのことであるが、 た表現で、 いかにも淡々とし 味わいの深い句で 老夫婦 0

大変でしたでしょう」

があるが、 う親の馬鹿が知れ」と云うの る。この句は可愛い子どもが は手がつけられないものであ 歩き 古句に「子を持ってやうや 子が放送します時間をふれ 「四六六」 親の盲目愛ばかり 光 郎 久しく会わない友を駅のプ がつた 三等を見てたら二等で来や

寸した唄を唄うのであろう

ラットホームに出むかえた。

谷水

騒ぎしているさまが眼に見え るようである。 子どもよりも親の方が大 四六七

員長 たのを見て、 厳粛な告別式が滞りなく終 スムースにやつたと葬儀委 よってハッキリあらわされて 場合の二人の関係がこの語に

りに事務的に答えられた とねぎらいの言葉をかけたら スムースにやったよ」 馴れているよと云わんばか いかにも、こんなことに モアを感じたのである。 スムースという言葉 四六八 0

下品な言葉ではあるが、 かったのであろう。 姿のみすぼらしさがなさけな クを提げている友を見た時、 あるまいと三等車のとまると とは聞いたが、大したことは 東京へ出 田舎にすっ込んでいる自分の て来たというのである。 と云いながら二等車から降り ころへボャッと立って待って マートな風采でボストンバッ オーイここだ、ここだよ」 「来やがった」と云う語 やがて汽車が停っ て、 出世をしている この

でもでもと女あくまで逆う (四六九) 高

いると云えよう。

世の中にはいるものだ。 うだと云って、素直に請けい の大したことではないにして 男の云うことを、「でも」斯 も「でもでも」を繰りかえす が逆らわなければならんほど ようとしない斯うした女が 事件は少しも判らないが、 それ

詩人と川柳家と詩川柳

110

は言えない。この場合逆必ずしも 言って、川柳家は詩人たり得ると 但し詩人は川柳家たり得るからと ある。この場合逆も亦真である。 ないのか。と言えば、その通りで 家は詩人でなく、詩人は川柳家で になる存在である。それなら川柳 川柳家という人間は詩人の対照

もっとも詩人とは詩

(現代詩)を

の職業のままでは川柳は作らない

場合だと、

生きんがための仮初め

るし、川柳家たり得るが、

更は官更のままで川柳作句は出来

ると、それは、

川柳的

(俳句的)

たとえ川柳を作ると、俳句をつく 創ることが本命には違いないが、

技術(芸術)=形式=批評(クリ

作家が俗性的人間であるように、 あって、詩人の場合は川柳家 真ならずである。詩人とは人間性 性丸出しの一行散文作家である。 でも音楽家でも芸術家一般の、そ の根原的な乃至は宿命的な存在で それ故に、会社員は会社員、銀行 川柳家とはもともと詩性の無い俗 か思えない不思議な存在である。 の詩人であって、これは、下駄屋 れぞれの現象として捉えることの 員は銀行員、 作家の中でも全然詩性のない散文 るよ」と放言したのは有名だが、 菊地寛が死に土産に「詩は滅亡す 人の目からは霞のような存在にし 来る普遍的な詩性をもつところ 小説家でも俗物の親玉であった 肉屋や、散髪や等の市井の俗 俳人でも、小説家でも、画家 商売人は商売人、官 0

高

鷲

鈍

亞

小遣をちよいちよい立替え

何

巧みにつかんでいると思う。 のである。 女性心理の一面を

## 四七〇

出

が説伏(しゃくぶく)に来た。 でやす 新興宗教の創価学会の信徒 説伏に来たとは知らずおい が、 寸

四七二

さも気やすく、「おいでやす」 さり「おいでやす」と迎え入 られているのに、説伏に来た いうので世間から随分と怖れ 物を強制的に焼却せしめると でなく、神具、仏具等一切の 伝わる宗教をやめさせるだけ 説伏というのは従来その家に たというのである。知らぬ 知らぬものだから、 歓迎出来の説伏へ、 あっ 50

と云った下五のムジュ 白く感じたのである。 家出して来た妹へ借りが出 四七一 ンを面 から、

る兄の都会での生活は決して て来た。 兄夫婦を頼って、妹が家出し クではない。 早くから都会へ出ている しかし、 僅かばりの妹 頼られてい 一

> う甘いものでないことをうな させることを詠んだもの、 ては兄も都会にあこがれて家 かせられる句である。 して来たことが想像される 都会生活と云うものがそ 曾 0 つかかり

この という口語調がいのちだと思 対する心境をザックバランに 妻えの愛情もよく出ている。 詠んだ何として大変面白い。 えてや 中年のサラリー 子がいてもうすい化粧で迎 句、 下五の「迎えてや マンが妻に 鳩花

### 母娘してぼちぼちしとく大 四七三 永 客

方に違い 位にしといて早くお湯へ行き 庭はかなり沢山ある。 ましょうよ」というのが娘の 除をするのである。こんな家 には家にいない。仕方がない んとか理由をつけて、 父親はいても、 母娘して、ぼちぼち掃 ない。 面白いネライ 何んとかか 、大掃除 一これ と燃 句。

### しょ 二度とこんな出ものはないで だから安くしておきますよ。 ているところへ、「質流れ オメガの時計が欲しいと思 質流れのオメガにうかと引 四七四 (麦太楼)

ある。 であることがこの句のヤマ れたというのである。オメガ れが贋物で、うまくつかまさ 算断して求めたところが、 んなに安いのだったらとムリ とうまく談し込まれて、 そ 0 2

## また次へ移る火の手をうれ 四七五 (主井堂)

事の彌次馬心理を ってるような口吻である。 だまだ焼けるでしょうなア じるのである「この風ではま ると、何んとなく壮快味を感 と音がして又次へ火の手が移 事の彌次馬である。パチパチ のんで見物しているのが、火 いくら寒くても、 しがり え拡がるのをうれしが 0 かたずを かい h

> を詩川柳と概念規定をした。 柳と比較して、詩性をもった川柳 ム)であらねばならない。それ ィック)を通したところの詩(ポ 俗性をもった本来の川 る。 り

り返すなら、詩人は川柳家でな

川柳家たり得るのは、仮初

故に冒頭に述べた点をここで繰

歌よみであり、

絵画き屋であ

柳家が、 俗物は川柳、 いくら勉強しても、

意味で、

川柳家は川柳以前を考え

て川柳人たり得るのである。

詩性的人間の実在的存在とし 川柳以前の人間性が問題であ

ない人間である限りは、詩人でな

歌を作っても俗物であり、その意 と、俗性との二つの相容れざる、 味では、川柳家であり、宗匠であ 俳句、短歌、 る。故に詩人が川柳を作ろうと、 異質な人間的存在があるのであ ない。そもそも人間性には詩性 上って真似しようとしても、絶対 に詩川柳は作り得られるものでは だから宿命的な詩人の作る詩川 市井の俗物的凡庸人である 絵画を書こうとも詩 俳句、短 飛

するところの川柳人である。

合川柳家という具体的存在を抽象

捉えることに他ならない。 の川柳家として現実的人間存在を

この場

# 川雜備前支部創立十周年記念川柳大会 四月二十日(日)十二時から

牛神会館

ある。

人たり得ることも考えられるので

川柳家を抽象する川柳人は詩 川柳以前を考えることによっ

○投句 題 棚 女 刺 若 タテ六寸ヨコ二寸の句箋。 年 草 医 身 (各題 2 何) 浜田 田 北 麻 岡山県和気郡吉永町福満 山陽線吉永駅下車・駅前に案内所あり 垣 JII 生: 麦太楼 方大 春 葭 巣 功 選 選 選 選 選

会費 席題 柳話 投句者八円切手四枚同封の 百円 五題 「長生きと川 (2句)当日発表 (写真代とも) 北川春巣博士 柳

費を添えて四月十八日までに左記 裏面に住所氏名雅号明記。 へ送付。 会

岡山県和気郡吉永町福満八五六 永 松 東 岸 子













# 省のときがきているのである。

### 夢の宇宙列車が、雲のようにわいてきた。 われわれは「これでよいのか」と、世界総反 スプートニク時代にはいって、現代の不安と 争も平和も機識月

### 不安という感情は、説明はむず (不安神経症について) ら見 た 巣 う不安から、車道の横断に気を付 い、自動車にひかれはせぬかとい 不安であるが、伝染病にかかりは ではないか、という予期の感じが に危険を避けるために役立つ現実 安から火元に注意するのは、実際 け、火事を起しはせぬかという不 ないかという不安から手を洗

一、不安の種 北

111

不 医

か

手紙を投凾したが、底へ届いたか どうかが気になって、どうしても かましく云われる夏季などには、 という句もある。水道の節水をや 特に困ったものである。ポストへ 節水が出来ぬ神経病みが居 的で、

不潔物がついているような気がし る。これが手を洗うのに、どうも 的不安で、誰でも経験する所であ

て半日もかかりきりだとすれば病

り得るのである。 あるが、区別の出来ない場合もあ 不安とは、階段的のものであっ 立つ不安と、役に立たない病的な のをいうのであるが、実際に役に ような神経病みもある。 て、はっきり区別の出来ることも 神経症的不安は、この病的なも

それ程恐れる必要もないのに、心

ば、これは病的と考えられる。又

臓麻痺で頓死した人の新聞記事を

見ただけで、

このような症状が起

るとすれば、それは普通とは云え

何か危険なことが襲って来るの

るえが起る、ということであれ

それ以来何の理由もなく動悸やふ

危険がなくなった後まで続いて、 ある。所が、こんな症状が現実の 悸などもおさまってしまうもので って来ると、この不安は消えて動

安であるが、

電灯のついた家に帰

ががくがくする。これは現実的不 出ずひどくなると手足がふるえ足 感するもので、動悸が打ち、声も 子供は勿論大人にとっても不安を けられる。暗い道を通ることは、 的不安」と「神経症的不安」に分 学的或は精神病理学的には「現実 であり、誰でも知っている。心理 かしいが、誰でも経験のあること

の中で前記のような不安が特に強 不安神経症というのは、神経症

られない落付かぬ感情におそわ

柳家は するようなものを呼んでいる。川 迫っているかのように感じて、時 にははげしい不安発作を起したり 何らの危険もないのに危険が

的であると思うであろう。 とも詠んでいる。これは誰でも病 そうなり ビルの影わたしへ倒れて来

必要もあるまいと他人には思える 句になっていると云えるのであ いる。それを穿ったために立派な のに、本人は本気で強盗を恐れて の句は、長屋にいて強盗を恐れる

ポストをはなれられない、という られている。この不安はもともと はその一つで、不安そのものが形 前がつけられている。不安神経症 色々の症状となって現われ、その に何とか打克ちたいと思う働きが は何かの不安であって、その不安 を変えずに純粋な不安として感ぜ 症状によって又色々と神経症の名 来ない。患者はいてもたってもい い、自分ながら理由の分らぬもの 漠然としていて摑みどころのな であるが、それを追払うことは出 一般神経症というものは、原因

強盗の話長屋にいて恐れ ひさみ 4:

うに、不安神経症とは別の名前の は、いつも心臓ばかり気にするの 病恐怖症」となり、心臓が破れて ので遂にはそれが固定して「精神 う。気違いになりはせぬかと心配 という気持で一パイになってしま いか、今にも死ぬのではないか、 れ、今にも気違いになるのではな 係の深いものである。 怖・不潔恐怖・計算恐怖、等々と うになって来る。その特定の物は 逆に或る特定の物を見たり経験し 神経症となる。そのうちに今度は で「心臓神経症」となるというよ 死ぬのではないか、と心配する人 する人は、気違いばかり気にする れらも前述の通り不安神経症と関 電車・汽船)男性恐怖・女性恐 実に沢山あって、高所恐怖・尖端 たりすると、不安や恐怖が起るよ いくらでも名前がついている。こ 恐怖・雷恐怖・乗物恐怖(汽車・

# ニ、不安の原因

出現した。 月前、酒を飲んで帰宅の途中電車 を読んだ。三十二才の男、約一カ 車に乗るのが不安となり、加えて の中で尿意を催し、こらえ切れず 不眠、不安感、動悸などの症状が に車内から放尿した。それ以来電 最近次のような不安神経症の例

る、と学者は説明するのである。 うな心理的基礎があったのであ またま電車の中から放尿したこと はそれより前から神経症になるよ が原因のように見えるが、実はそ れは単なる誘因であって、実際に 所がこんな症状の起るのは、た

い人である。

寸した欲求の不満にも堪えられ 術がうまくそなわっておらず、 人がらというのは、この適応の 閉じこもってしまう。神経症的な

技

それは生れつきで、その「人がら」 い人と、なりにくい人とがある。 勿論人間の中には神経症になり易 ある。朝はねむくても起きなけれ の毎日の生活は、朝から晩まで色 らなくてすむ人もあれば、一寸眠 る。これを適応と云っている。所 感情のもつれは処理して 来ていする位いで、何とか欲求の不満や 頭が痛くなったり、夜眠られなか り、気をくさらせたり、たまには 々腹を立てたり、いらいらした ねばならない。それでも我々は時 ない。腹が減っても仕事を片付け って、あいそよくしなければなら ばならない。嫌な人とも相手にな 々な欲求の不満やもつれの連続で が関係するのは当然である。人間 と、この個人差はもっと大きい。 るが、社会的な欲求の不満になる がこの処理の仕方に上手下手があ ったり、食欲が進まなくなったり ないで、すぐに自分のからの中に は生理的な欲求についての話であ り、疲れたりする人もある。これ りが足りなくてもいらいらした るのである。人によってあまり眠 一寸した軽蔑や無視にも堪えられ

る。又家の中では、親の子で あ会社に勤め或は商店を経営してい は日本人で都会又は田舎に在み、 原因について考えて見よう。我々 次に感情のもつれを起こさせる して来はせぬかという不安、

又人

安や、人工衛星が頭の上に落下

接的であって、そのために神経症 ぎず、感情のもつれを起すのも間 はただ間接に結びあっているに過 境だと云えるのであって、これに せていなければならぬので、互い 対人関係は、いやでもつらつき合 ある。親子、夫婦、親分子分等の る。社会に出ては親分又は子分で を起すというケースは少いのであ 大集団においては、そのメンバー 対し国家とか大都市などのような る対人関係が神経症を起し易い環 互いの話合いでどうにもなるとい の人々の行動は、理屈抜きで、お 情的の結びつきがあり、この集団 の感情に敏感に影響され、強い感 原因は、何と云っても対人関係で られる。神経症を起す最も大きな 起すことは、先ずないものと考え 会的環境そのものが直接神経症を 住んでいるというような自然的環 あり教師又は生徒である。日本に 特徴がある。この小集団におけ 政治・経済・文化のような社

あるように思えるのである。 詠むことに本質があるのと関連 として人間関係の小集団のことを 展がそれ程著しくないようだ。 で発達したが、川柳の方はその発 いう意味のことを本誌に書いたが (第三六七号)、これは川柳が主 水爆戦争が起りはせぬかという 私は以前、科学は人工衛星にま

である。例えば嫁姑の問題など 大昔から現在まで大した 変化 うである。 も出ていないということになりそ 見た所で、その句は昔の句を一歩 あるが、現在たとえそれを詠んで 詠まれており、現在でも同じ問題 も、古い川柳にあらゆる角度から まで変化はあまりないと云えるの く、従って川柳の舞台も昔から今 対する不安は誰でも持っている不 が随所に起っていると思えるので に対し、人間関係の感情問題は、 ようなことはないのである。これ 起し、動悸などの生理現象を伴う 安であるが、それが不安の発作を

又恋患いの感情のもつれから結核ラしている所がよく似ているし、 と人は云うかも知れぬが、ブラブ 聴診器を考案した人であるが、結 八一一一八二六)という学者は、 るのである。ラエンネック(一七 が起り易いということも考えられ 患い」とは丸で違うではないか、 云われている。「肺結核」と「恋 は現今の肺結核であるが、その他 かなり残している。癆咳というの 古川柳の作者は「癆咳」の句も 「恋思い」をも癆咳と呼んだと

結核の誘因はあるまいと思う。」時代に、「陰うつな気分程確実に と喝破している。一八八二年コッ 伝染病であることも分らなかった の原因の中で結核菌を除けば、 核菌はまだ発見されず、又結核が ホが結核菌を発見した後も、結核 矢

> して、「癆麼」の句を作ったこと して、肺結核と恋患いとを同一視 が二百年も前に、そのことに注目 ば、神経症の人達のもつれの原因終戦後、日本のある統計によれ 敬服に値いする。

り、妻の夫であり、子供の親であ

以外の社会的なもつれであったとを占め、残りの一八・四%が家族 等)のもつれが全体の八一・六%婦、同胞、籐姑、義父母、義兄弟 いうことである。 を調べると、家族内(親子、夫

# 治療と予防

えば、広い意味で、 たのも、或は現代の新興宗教をも 強い特徴があるので、心理療法が 理療法の役割を果していると云え 含めた信仰や信心も、すべてが心 なえを立たせ、めくらを開眼させ 有効のようである。 るということはむずかしいので、 症はもともと、生れつき神経症的 しこの人がらの人は、被暗示性が を引き起す家族內対人関係も変え 一旦かかると仲々治りにくい。然 、がらの人がかかり易く、又それ 不安神経症をはじめ一般の神経 心理療法とい キリストが足

万病に効く信心をすゝめられ 三 歩

が発売せられ、製薬会社のドル箱 イザーと云われる神経症の治療薬 者も知っている。近頃トランキラ れで治る人が相当にあることは医 信じているのである。そして又そ 人は、実際に信心が万病に効くと 信じないかも知れぬが、或る種の 杞憂であるかないかということが ばがありますが、この句の内容が

れは当今神経症がいかに多いかを のである。 れると、患者は効くように思うも のと私は思うのである。 物語るものと思うが、同時に又暗 ジオにテレビにと、大きく宣伝さ になりつつあると聞いている。 示療法の大きさも物語っているも

のである。 う。その意味で私は、我田引水か どもその部類に属すると云えよ 勿論、スポーツ一般、映画、 整することが重要である。その他 対人関係、職場での対人関係を調 最もよい予防法であると信ずるも も知れぬが、川柳を作ることは、 法である。流行のサイクリングは 適当なレクリエーション によっ て、もつれを解消させるのも一方 なお予防法としては、家族内の

蠅たたき」によってさえ、うっぷんという句の如く、人間は「派手な をはらすことが出来るのである。 たたき 水

# 現代の不安

田

古

方

の句であります。杞憂ということ 昨年九月の川柳塔に出ている私 きそうでなく んげん時代そうそう続

。新聞にラ 問題なのです

はた又碁・将棋・バチンコな

云いまけた養子の派手な蠅 堂

ることにいたしましょう。 いるかどうかということから考え 永い過去以来、私たちは地上 先ず現代の不安がここまで来て

地震、 足もとがぐらつき出したのです。 生きてきました。しかるに、その 原子力が使用されようとしている 油、それに代るべき資源として、 めてきました。しかし埋蔵量に限 落下したときに始まったといえる りのある鉄と石炭とそれから は現代の文明をここまで押しすす 年を経過しています。鉄と石炭と 代に入って、すでに少くとも二千 銅器、青銅器と使い進んで鉄器時 物の絶滅も考えられるからです。 たら、地球の破滅というより、生 でしょう。原爆が野放しに使われ 一つ新手がふえたわけです。 道具を使う人間は木器、石器、 その不安は恐らく原爆が広島に 雷、火事、台風の外にもう

されるのをどのくらいなげいたこ その罪ほろぼしだときいてい トの平和利用を念願しながら、心 うとしているのです。ダイナマイ のです。 ノーベルのなげきを繰り返さなけ す。新らしい動力資源、 とでしょう。ノーベル賞の設定も ならずも殺人兵器により多く利用 トの発明者ノーベルはダイナマイ いはそれ以上の大革命をもたらそ 薬の出現の時と同じぐらい、ある 武器としての核兵器の出現は火 原子力が

この原子力という動力資源が地

打ち開くか逆に行きづまりをいよ 球上に起らんとする行きづまりを 不安を如何にさばいて行くか。 いよ深めてしまうか、又、現代の 今年は地球観測年ということで

新らしい資源を求める南極大陸 命を人類の幸福のためにしらべて ち上げました。これも、地球の寿 の観測が列国の協力の下に行われ といいますが、その末法は今から 道ゆきやら判断出来ないのです。 つかない、あの憎むべき戦争えの やら、人類にとって取りかえしの ねないのです。平和のための平和 正法五百年、像法千年、末法千年 います。仏説によれば釈尊の滅後 いるわけですが、ちょっとひねれ て、今や、それが終ろうとしてい 一千年前の平安末期にはじまっ オールマイテイの武器になりか たソ連は人工衞星をいち早く打 いる一方、大陸間弾道弾を完成 そとに底知れぬ不安がつきまと

れて来そうもありません。 いつこう、そうした救世主が現わ った文章をみかけたものですが、 ひところ、英雄待望論などとい

低迷しているのがアプレゲールで のです。この科学的前進が、世相 目ざすところへ、つっこんでいる だ科学はたしかにこれらの人々の 求めています。原子力にまで進ん もがきにもがいて、その解決法を がれようとする大多数の人々は、 りがあるものとして、それからの に反映して、それが未熟の状態で はじめあればおわりありで、終

見当違いだといわねばなりますま 活しようというのであれば、大分 年前、十五年前の修身や道徳を復 のかわかりませんが、少くとも十 身や道徳の問題を考えていられる あり、太陽族なのかもしれません。 会の規範の一つにすぎないのであ に動くものであるからです。道德 ます。 た氷山の一角にすぎないのであり であり、より深い根からあらわれ 営みです。道徳でいう善は相対的 り、あくまで人間のための人間の は法律より巾は広いとはいえ、社 い。道徳というものは時代ととも 松永文相はどんなつもりで、修

としない方法であります。一見極 ら、その解決法をあえて求めよう の滅亡であることも承知しなが 前提の下に、それがわれわれ自身 の道は、やはり終りがあるという ようとしているのであります。 めて消極的の如く見えて、実はよ 根の深い所は根本的解決を求め 底知れぬ不安との対決の今一つ

も、防御も忘れたところに、何か以外のものではないのです。攻撃 本当のものがみつけられそうで が、仇に復ゆるに仇を以てするや 人の間によくいわれた言葉です 方ではやはり、殺し合いの世界 攻撃は最良の防御なりとは旧軍

実体とかいってもいいでしょう ルは、物の本当の姿、真相とか、 ルということです。アキラカにミ せん。アキラメとはアキラカにミ これは所謂アキラメではありま

> とであります。 が、それを間違いなく承知するこ

とを承知しようとしているので る道さへ開きました。 て、これを自分達のために利用す 理由をあきらかにしました。そし れた地震、雷、火事、台風などの は、かってはすべて神の名でよば きているのです。自然科学の発達 いる全てのことは、この本当のこ 若い人達が学校の教室で学んで 私どもはあらゆる実相の中に生

ずめであります。色眼鏡をかけて 正しく見ることを拒みがちです。 い、聞きそこないのすかたんのし 不幸ということは、思うように 心の世界ともなれば、見そこな す。だがそれだけでいいのでしょ

ん。さればこそ、喜怒哀楽を感じ んな人って居るものではありませ はほとけと申します。なかなかそ のわかる人は遠人であり、仏教で いても、見誤らず自分の本当の姿 が、何時、如何なる状況の下にお の赤いのはよくみえると申します とは慾にほかなりません。人の鼻 す。迷いは慾のせいです。色眼鏡 に迷いの曇がかかっているからで す。苦しむのは本当の姿を見る眼 面白いのでもありましょう。 ない人とてなくそれでこそ人生は

れば、不安のあるまま、不安がな は問題でなくなります。不安があ この考えを押しすすめてゆく 地球が滅びる、滅びないなど

ければ、 日を、一期一会と観じ、 い、満ち足りた暮しをするところ なおさらのこと、 悔のな 今日

たじけないものです。 にまでゆきます。

ということばでいいあらわされま ならないことです。それは苦しみ 瞬、一瞬に幸福を味い、自覚し、 沈んでしまいかねないものと、一 も、一歩ふみはずせば奈落の底へ への鍵ということには変りなくと がいです。 積み重ねて行こうとするもののち

青少年たちの自由な桃色ごっこ

その頃のよろめき中年男女は、

を、アベコベに習っていたようで

くれるでしょう。 くも現代に対決する叡智を教えて 克服にあります。そして、さかし 芸術するものの幸せはこの不安

くらがり天囯 小品集である。 の目で見た「よろめき日本」の これは場末の映画館で、私のこ タイトル 場末の映画館で見たもの 不二田一三夫

うな仇討物ご法度の時代劇や、 終戦直後の映画は、忠臣蔵のよ 第 1 丰

もない映画をよろこんで観に来る や大正生れ組のほうが多かったの のは、若い人たちより、明治生れ 劇ばかりだった。こうしたロクで スやハダカが売りものになる現代

真実を求め、一句のうちに宇宙の たものにすぎません。一枚の絵に においては変りないのです。幸福 た自然の祕密を人間がさぐり当て 力も、人工衞星も、もともとあっ 余裕をもつ人生こそ、貴くも、 神祕をもりこもうとするのと本質 となる調和が生れるのです。原子 距離をおいて、自分を眺め得る そこから、あらゆる幸福の根底 か である。いわゆるアプレには、 はそうも大胆にふるまえないの た。その点、明治組のアヴァンに を与えられていたからでもあっ ったし、やろうと思えば誰に遠慮 うキス位いは珍しいものではなか 当っていたようである。 でムシを抑えていたというほうが で、ハダカ・ショウや、エロ映画 気兼ねもなくやってのける自由?

うのは他に目的があることは云う ある。古い小屋で階上はいまだに 臭いちょっとしたドンファンであ のは、ダンス教師で、場末のドロ までもない。その対手の男という る。同じ映画を毎日観に来るとい もあった。こんな話がある。 畳敷になっていた。 いても、かならず階上へ行くので った。二人はいくら階下が空いて のように昼間からアベックで来 る医師の娘さんが、ほとんど毎日 小館の近くで開業している、 あ

るので、階下右奥にある私が経営 する売店からは丸見えの位置に のU型の左側の最前列に二人が座 に、階上はU型になっていて、そ どこの劇場でもそうであるよう

映写中は場内が暗いので、

小さく載っていた。お定りの生

もいないである。 が、私のように年中暗がりで生活 実他の観客には見えないのである も、それが手にとるように見える している者には、腕が一本動いて ンをそこに展開するのである。事 て、スクリーン以上のラブ・シー

は誰にも見られていないと思っ

ども達は、人情物や恋愛物は見な いたのである。 は隠れん坊なんかしてよく遊んで いもしである。だから気にいらな だしたのはこども達であった。こ との二人の実演を、まず気づき 映画になると、階上へあがって

明治組であった。 なって、これを真似しだしたのは こども達の口からこれが評判に ここに、いっも五六才の男児を

やもめ風の四十男が登場

うだが、オカッパにして一見十四 で精薄児だった。もう十八九だそ 五才位いより見えなかった。 この四十男は前々から、私のブ こしよろめき男に狙われたの これも近くの寿司屋の娘さん

うこの精薄児は人工中絶をするこ で、いままでにも女学生に悪ふざ ラック・リストにいっている痴漢 づけていたようである。 店で菓子を買ってはこの娘を手な けをする注意人物であった。私の もならないが、この被害者の両 をおさえていないだけに、どう ゆるせない事である。しかし現 まさかと思っていたが、とうと はある程度見逃がしていたが、 空かした子供たちである。それら な細い腕がそつと伸びるのは腹を むヤツには手を焼いた。蛇のよう 借りに来るのはまだ可愛いが盗

ろうか。 児料位いにでも思っていたのであ ら閉館まで、ずっと帰宅させない 親にも大きな手落ちがあったので のである。入場料の五十五円を託 の商売の邪魔になるので、開館か ある。この白痴の娘がいると、店

らなかった。

なきを得たようであった。 そっと親御に密告に及んだので事 の男には二人の子供もあって私が 話はもどるが、医師の娘の相手

い平和日本では情けない。

3

## 2

うに小店へころげとんできていた じたものである。さすがにぶっつ 映画館が彼らの根城だった。金使 れていたのである。 ので、トンダところで私の顔が売 晩食ったヤツなんか、きまったよ 画館が警察の近くにあるため、 にタダで菓子を食われていた。映 いである。その代り私も相当彼ら そい場だけは顔を立ててくれたも なかったが、私が仲裁にはいると の一人ぐらい来てもどうにもなら で、今ほどハッタリのきかぬ警官 け不番とあって、なかなかの熱演 ち込んで、画面以上の大活劇を演 先の縄張り争いを映画館にまでも いも荒いが気性も荒かった。得意 公前の金儲けをしていたころは、 チ ンピラが米や芋を運んでは一

張るべし。

だということである。日本人胸

当らないと思う。アメリカだっ

て、その製作本数の七割は西部劇

らだ。 らわないと、こっちが食えないか の苦手である。一の客はなんと云 である。それに「ママ」と云う子 を観ながらムシヤムシヤ食っても っても長屋グループである。映画 供も「坊や」とよぶご婦人も小店 た夫婦が逃げるように通りすぎ 小店にとっては好しくない人たち た。店の前を早や足で行くお客は 売店の前を二人のこどもを連れ

後姿は妙にさびしかった。 を引張るように出ていった夫婦の 間待ちだったのかとも思ったが何 いない時間だったので、バスの時 人だったが、三本立の半分も観て に出て行った。ついぞ見かけないれがまた店の前を通って風のよう こない。「しつけ」がよいのか、 くれそうな人なのに、まだ買いに ら見て、どうしてもウチで買って 子のビンを横目でにらんでいるの た。上のほうの五六才の女児が菓 故か私は心をひかれるものがあっ 金がないのか、どっちかである。 その翌日の新聞に親子四人心中 小一時間ほどして、その親子づ 先刻の四人連れの親子の風態か

まだ落し物や忘れ物が返ってこな 思ったからである。戦後十二年、 なヤツが憎くかったし情けなくも は、首を踏んづけてでもタダはや 私も明治組の一人として、こん 観せてやれなかった映画を、子供 いか。そして次の行を追えば、せ チの映画館の名が出ているではな 活苦である。流し読みしている私 のことである。 らに観せたという遺書があったと めてもの今世の名残りに、ついぞ の目がギョッとした。そこにはウ

でもそれを思うと胸が痛む。 あげる気になれなかったかと、 ぜあの時キャラメルの一箱ぐらい ったかどうかはわからないが、な 果して、前夜の四人がそうであ 今

稿を終りたいと思う。 に、一つ明るい話を提供してこの って日本国民低級なりというのは チャンバラ映画のはんらんによ 場内がパッと明るくなったよう

名女形として天下の子女の紅涙を る政治をすることにある。商品雑 が立役にも二枚目にもむかず、 が、好漢惜しむらくはそのマスク (故人) や衣笠貞之助 (監督) が、 島時代からの人で、立花貞二郎 え直す時がきているのである。 誌や商品映画で数化善導をしよう な娯楽にするためにはまず健全な しぼっていた頃からの老優である 明治組や大正組がもっともっと考 など机上論にすぎない。とにかく 庶民の天国である映画を、健全 横山運平氏(新東宝)は日活向

すでに四十年にもなる。 けている。私がこの人を観かけて 々と脇役専門で今日なお歩みつづ

に尊敬の頭を下げたものである。 らされた私は、正直、OB川柳人 命を打ち込んでいるのである。こ を持っているように思われる。 **値鑑であろうと思う。** れこそは日本映画史を飾る芸道の であろうと自覚してか、その一本 を、川柳生活五年にしてやっと知 々と川柳を行く人のいかに多いか 十年、五十年と、地味に、ただ黙 はわれわれ川柳人と共通するもの 映画人のなかに、横山運平のそれ んな端役にも、これが遺作になる 本に、あといくばくもない全生 銀幕の最古参横山運平氏は、ど 功利と売名にきゅうきゅうする

人も、この老優の心を心として、 とをお願いしたいものである。 さいわいにして、わがOB れわれ後進のよき組鑑たらんこ



桃 谷 天 館 順

世界的常識 りがたのしい 新强力殺菌剤G11配合で-

の生活所片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 諸大家の真夜中の夢から、晩酌の銚子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生 一編集局

石 JI #

5

19

阴

石 市

棄 郎

★一時――五時 ラジオ体操で

をストーブに向け、十数種の新

覚され、

先す煙草を二本。

がすがしい気分で仏壇の扉を開 に朝日二箱)塩で歯を磨き、す (日 日 ★十時 て本業に移る。 聞の書評と新刊広告欄を一瞥し 一十六時 けさは十八万

おりで中味はない。以前は分類 にしてもあまりの量にあきれる よく人に言われるが全くそのと 「お前の頭は索引のようだ」と

★六時——九時

一食主義。朝

はある。

つい近年のこと。変ったもので 合掌できるようになったのは、 打つ。人前でも、気恥しくなく と妻の座である。念願して鉦を を除けば御満座。その空白は私 く。過去帖の、三十、三十一日

余冊。 数文を読むだけであるが、それ 三千〇一冊目から書物の分類作 業。戦後のその整理高四万五千 尤も標題・序文・目次・

ほどほどに家を出て鈍行に乗る り好きではない。駅が近いので む。一カ月の量一升、酒はあま は一杯の紅茶と清酒の場合を飲

-終着駅までの五十分は、<br />
む

前に職場(図書館)につく。尻 しろ静かな書斉である。十五分

とおしくなり、灯のまさに消え 作業の繰返しにうんざりしてい なったこの頃、無性に仕事がい たものであるが、停年の間近く

> 時までも悩む。パン牛乳、直ち 外気をすう。笛声、運わるく七

に満腹感。胃下垂に困る――秘

結

★十七時——十八時 十七時、拍 っている。身勝手なものである なんとする悲哀をしみじみ味わ 子木の合図で退庁。帰路はきま 時間を専ら句作に当てている。 い。釣革にゆられながらの空想 って電車は満員。見慣れては須 また楽しいもの。私はこの 明石間の風光も珍らしくな 夜は孫と

★十九時——二十二時 ぬ言葉で話かけて来る。孫を相 いて私は孫と遊ぶ。言葉になら 私の時間である。テレビ・ラジ オは要や息子夫婦にまかせてお

★二十三時——二十四時 二十三 手にしていると心が丸くなる。 繰るのがせい一杯というところ この頃ではハガキを書き雑誌を が、孫が生れてからこの一年、 孫が寝つくと、残りの時間を茶 朝までの死を横たえる。 時、焚き添えてもらって入浴。 ほとんどそんな関もなくなった **雀対抗戦に興じたこともあった** 打ち、また若夫婦と老夫婦の麻 きには息子と将棋をさし、碁を の間の掘炬燵に持ってくる。と 一日の疲れを流し、そして翌る

愛媛 県 蛭 子

★二時——三時 喘息発作。老境 耐力へる、服薬。 (自己注射は ★四時 ★五時 ★三時

\*一時

★八時 ★七時

風鈴の風うまし

さけ特殊の噴霧器を 本籍をうつし

★六時-

★九時 服る。

★十時-ら菜園産恵まる興。豆腐、納豆 野菜多種類生食もする。友人か 段事、栄養量考えず。 鉢ラジオめざまし、板一枚机に

に食を、箱に薬を、層容痰壺火 て、われ死なん。一輪挿、水屋



をやく。佃煮工夫、無偏食、い 海魚を欲すれど川魚乏し、乾物 煮豆好。嘗味噌佳。朝川魚、夕 かもの食せず。

★十一時——十三時 来客か、晴 る。発声難儀、老素応対。適時 に書見、句案。 読雨眠か、窒甚だくらし。眼痴 (白內障) 自愛、返信堆積懺悔 - 坐椅子にて客の高話を承わ

★十五時 ★十四時――おヤツ。愛果実、賛 銘菓。薄茶煎茶番茶白湯よろ 汁粉羊羹、田舎饅頭飴玉金団。 水吞まず酒も。甘党也、 ★二時-★一時 ★三時

★十六時――三畳独占は贅沢。二

★四時-

★五時

幅懸く。「木枯や」在田書下に

★十八時——夕餉、雄炊麵類而苔 ★十七時—— 全に冬簡也。 小樽 īţī 直

真綿一、二は重圧、要離被架、 炬燵裡C八度下がれば冷凍。完 四、五天井に近きがよし。上は 代用、老婆を呼ぶ土鈴、敷布団

★二十二時-★二十三時— 也。

\*二十一時— ★二十時一 ★十九時——ラジオ老妻慰安。 ★二十四時―― 老妻まだ就得せ 軽るき発作。風ふけば愛し。 ず。我む。病夫は六十年の不作 遠慮、知己の放送欣喜) る。剃面骨折り。 ホルモン等。洗面一ト仕事骨鳴 射つづく。葡萄糖ビタミンB1 満七十(亥)体重七貰、来診注 (朝は私の知識、屋は働く人に しゃぶって 誕生日 一目ざむ。痰つまる。

> ★十時-★九時

ぐ事の出来ない事も小 ゆっくりとしてくつろ に時々奥へ入りますが

一孫が多いのでテレビ

売人の立場上、致し方

★十二時— \*十一時

江 武

ります。冬季でも朝は しておるので、店は毎 夜十一時までやってお 家庭薬、たばこを販売

★六時――開業も三十七年位いで ★七時 すが、医療品、化粧品 ★八時――朝食は米飯です。食い 店舗の整頓。 六時前に起床。

> 以外は、いつも店頭に 生委員の仕事や保護司 三食とも定量以上、民 立っております。 の仕事、組合の役員会 意地を張っておるので ★十七時 ★十五時 ★十六時 ★十八時-

む。骨の美的始末研究

やむ微笑 アラを

巻嗜好。野菜、刺身、アラも求

あります。

にて、不定期な時間ば - 昼食も夜の膳も交替 ★十九時 ★二十時-ありません。

かりです。

★二十四時―― 俊間は、ぐっすり ★二十三時-★二十二時

来ません。店番のひま 多いので晩酌などは出

に作句する事と柳誌を

★十四時一 ★十三時

特に健康相談相手が

★二十一時·

くとっております。 とねむれて、疲れをよ



手內 寒々と 再婚の 編みながら亭主を抜け目 女房へ二号と 柏手の鳴りが汚職の 気晴しも出来ずに今年も 肥車挽いて通れば三 味 いささかのおごり我家の播でしま 原子炉に注連飾し 元墓場を入れ サイクリング恋のないのがより 十姉妹殺し 言葉まで変るで歳暮やめら おみくじの女 入院を待ってた様に ガンだともしらずに麦を播 まだ生きる気かカマキリの枯れ色 一月ランプを点けたまま 寮へ吹雪まともに突き 俺にま 别 話 水 養 れ ^ 動 信老 た十二月の忙 道 命 切れる知恵 難 t た 心院 1 办公 H て一九五 ラ る冬 布 安分 忘 手 服 なく 教 から れ はランランラン を 6 はきたがり 八 な 0) 初 走 当 悪 n 12 知 1) 無 勝 使 0 蠅 月 ず 譜 地 3 n n 来 V 宇 字部 X 器 极 Ш 縣 T 市 113 宗高 村 同同同 同同同同同 平 同同 百 ri 同 Ŀ 林 矢寸 粗影 旭童 実男 志

欲情を

高

る 女

為

0)

抵 気

抗

3 れ

15

うので、原句には申訳ないが全部 うちには完全に消える文字だと思 にあった、(廻)

はここ数年の

はり(廻)を使ってきた人が相当

本号一路集の(回り道)

日本語を」という良い原稿を書

本号には早川清生氏が「正

いる。ご協力ください。

華やかなページにしたいと思って

下街を大都会の近代地下

のような

例によって三十二行穴があ

埋めてゆくのだが、この

地

前号の続きのようなものを書 いてくださったが、私はこれから

心ではすでに 鎹となる子を

0

肌

S

よろめきの老らくののと世間さま

女

産

2

0

酉

B 市

野

呂

鵜汀

まとまれば困る見合へ足を テーブルに換えて晩酌味

クダンスまだまだほっためる若さ

熊

本

県

田

麦彦

のう

ちに

入れ

III 生 巢 郎

北

選 選

立話野球の 舞い初 鏡から老けたでしょうと 流行の色ボーナスで **肩掛を変えて落ち合うひとをも** 盃は師匠に舞 ささやいた口で毒づ よろめきも抵抗もなく土に お聞き下さいと涙でのろけ 玉ねぎの嵩でカレ 湯の鏡非番の 金とっておいて弁護 生活改善スリッパ あんたあんたいな ーマネーなので文珠の知恵。出ず ナスを渡 めの袂は京都の色で 胸を張 えと 散 0) n 1 士叱 本打たせる 言 < 拾 爱 買 0 わ うた 倦 5 9 生: 3 to 染 怠 6 0 \* 14 酒 83 期 t 5 れ 大阪 岡 FF. Ш ηŧ 市 県 板 伊 同 太 東千 原 蓑流 代美 明 林

717 同同同 三步

チョットやソットで「定留所」に

停留所」という文字は、そうも 定年」にやがてなるであろうが 「御題」に直している。停年は

もならないと思うので「停年」

托鉢も真っ

うたで風船 直ぐにゆ

土山

のついたは

課長の を

軽

5

J.

ス様のお話し

いつかいびきかき

鳥

取

秋

酒はのめのめなどと汚職

の黒田 来

もらい

浮気も

出

V2

三百六十五日 定食を母豪遊 フォー

起してくれる母があ

書き直すことにした。 は原文を尊重しているものの、 である。先生のご命令どおり発表 べく「食欲」と書いてほし とんど姿を消しているので、 帰朝」は "帰日 "に、 悠」という字も、 最近では 「勅題」 いもの なる

消える文字

不二田一三夫

# AND THE ME AND SHE MIN

万難を排して 親切な人だが利子は かぶりつきか H あらかたは子等のお古で着 薬代と思って食べとく肥 柿をむく冷たさ冬の 妻。スプーン・レースで主賓席から バストヒップ女工哀史も 们間の い看護婦がいたぞと見舞な戻り 険屋に堕さぬ先に 向ほこ持病の話 \$ 綿で数える 書にも書けぬくらしの底で生き 体で来て恋 所があって解雇の うて来た嬉しさコケシに 工星の下でワンタンすすり上げ 称で呼ばれて下積 労を感謝し に帰える んでフォークダンス つもりで居 根情を知って病み 重 類り 牛 3 迎 しばらく ら春 5 K 人と たくも \$ < 搜 を L を が来た春が来た たり居なんだり ば 夫 | 在願 見 7 金 選 で T る ま 居ない V n 恙 专 呆 15 如 込 6 切 J b 0 け n 祭 1) 5 ŋ 寮 ず 見 石 Æ 兵 15 尼 ME 野 M 松 龄 県 市 竹 同同 木山 口 永 同同同 则 同同 沢 同同同 同 同 尾 田水鏡子 田 守正柳子 虹 永断 美喜 鬼 项 休 美

顔見世でいびきかく老咎め 念入りの化粧を兄は 汽車で 前後左右アベックでも目 よその子は年をとばした程 初釜へぶんぶく茶釜 草野球の寝言を云うて子 寝ていれば良い病人が気を 内職の背中サロンパス臭わ 初氷張って居るから 嫁ぐ日の近し おみくじヘドライ 勝ってたら金鵄勲章 和服の足を組 深呼吸して淋しさを吐 器用さをかわれ狡猾さを トイ 人妻の牙城の 7 の引きあてたテレビにかじりつ ピッツと散歩ごときに着替えて 千円 走から赤旗立てた かり肩かっては大佐 コからトロッコ押 へ未だ拝み屋が ムに の有る日 九れへそ 借る為の素うどんとは知らず 編むだけに女の小風 ちもちと混ってる のびたぞめきは < んで人を寄 如 を 12 ŋ < 賽銭など上げ 子 B 7 思 黙 倍 П き出 H をつむり V を 考 2 ま 老 世 がゆがり 5 つけ 元 使 元 3 育 世 起 3 呂 7 婆 れ K V た 世 ず る 心 父 春 芦 出 大 大 高 大 大 企 整 2 阪 阪 RE 知 陂 R 訳 市 T TI 11 111 市 市 巾 里 中 同 同 島 同 同 同 디 IK Ш 西 竹 田 瀬 田 一兼治 章峰 松風 挽郎 凡茶 雄 圭 + 峰 都



川柳一年生 川柳一年生

# 佐内隆文

平松措大先生と言えば瀬戸内海沿岸地区では、俳句の虚子門下の第一人者であることは衆人の認め第一人者であることは衆人の認め第一人者であることは衆人の認める。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。先般NHK「朝の訪問」に於る。

## And when the min

待たされ 計画 恋という仕草 テレビにも飽きて三本立 死んでやるとは奥 空 ニコョ 無礼講と言うに着 オ 重役のコネまでつけてすべって来 専門と云う猪口才を 徹 流 十文半正座に デー 番を待 然煮からさじの坊 の巣のようにアパート 白髪どうに ルゴー 合せは夫の肩もも たされて払わされて恋は一般来 て 炭屋の 顔に 転車を貸してと 感ヘラジオの薬追 でも も聖徳太 へ壁のよ 粒を縦に b け ンの鼻唄天気つづ 裏 アー って 屑屋が渋ぶる値 ル鳴る静けさに 清 b いと軽々しくも の一手し 房 堪えぬ スト女房の 食べてるように 覚え 5 子 K た でた 師 な ンド 困 席 やが箸に 0 走 手の i る る 娘 たむ 顔順 か から 孤に耐 ŋ か + 3 M + 反 にさが 12 つ知 かっ 着 犬 続 な抗 育 二なな すな \$ 廻 の過行 邪 8 かっ 0 3 月 L 剰 3 n 期 九 0 0 りめ る n ち 月 7 旗 大阪 大 di 大 金沢 岡 Ш 99 貝 松 丽 RI. 飯 157 市 県 717 H.F T 藤本 万仲 米浪 同同 同同 半同同 同同 杉本たつよ 安平次弘 同同 細 H 同同 田 林守 進之 唐衣 淳 幸永 千草 真奇 株漢 夏 進 助 生 道

国ざか

いフト小便がして見

たく

ヨイヨイのような初

荷がぶを止

8

氷

見

市

関

すど女

金貯めてからはうすのろらしうち

見たこともない農相に褒められた

夏やせを養命酒にも

頼

て乗

鳥

取

鉛

木村諷子

つ名

同同

恩を仇 で 返 し た 勝済まへん済まへんと世渡

ŋ

如

乗り

貝

塚

千石

快人

十本で足り 酒臭い 月賦時代 逢えるあえないススキの穂吹いる 繁華街だから美人を連れて 三カ日島田の 赤旗を振ってるとこを子に見られ 資本家を悪魔と言って " 个化 、口で新 ッかを りずピー 粧道具も持 キャツシュで買うたをれ歩き い込みそうなよい 連れてレデー 似合う 5 年 スも 9 顏 決議 0 から T 度 切 齢 す 行 な 5 る 3 気 期 Ħ 阪 E 面 取 rti T 府 県 岡島 同吉 同同 土: 菁風 昌男 洋 舟 2

見て「君その方法もよいがその

古川柳は後廻しにせよ今や世をあの方法で行けばよいではないか、

川柳を沢山玩味研究して多作する

現代有名作家の作になる新

ことだ」と教えて呉れたので、

の全五巻を求めて古川柳から研

立秋君はこれ

を

からく基礎工事から築くべきであ

先ず「岩波文庫誹風柳多留

る。又私は石橋を叩いて渡る型の

川柳をやるにしてもすべ

私もこれに心掛けて勉

強して

瞭にして余韻のある句を作れ」と

特 悲しさをさとられまいと歩を合き 減税が響かぬとこで生きて もの想いめいて動 ささやかなスリル 映 自他共に許す すぐ其処に オーバを持 売で買ったと見え 画 けて五 館 奜 枚コハ から 口唇が有 たず不義理をしてしまい は禿と 確 念 ŋ 术 保 仏 せ かっ ケッの る 0 V2 0 5 席 包 ゆとり 短 勤 いる 修 車 紙 田丁 大 貝 米 熊 版 塚 7 本 県 粧 平 阪 E 同 1.1 同 同 淵 同 本阿 秀敏 季良 散步

に注意して呉れる言葉に「平易町 は注意して呉れる言葉に「平易町 に注意して呉れる言葉に「平易町 に注意して呉れる言葉に「平易町 に注意して呉れる言葉に「平易町

一上の一本

心斉橋大丸北の辻東へ

御

門

TEL @ 6684

御集会には階上御利用下さい

栄転が 十二月テレビを当てる気にもなり 火の気ない火鉢の 大風呂敷ひろげてノー 看板娘愛想ほどに 失恋をした様 かくれんぼ 号令をかけてた声が 空小樽 なむ三宝もうやってきた十 心中をするのに大学 ラッシュアワーと縁 長尻へ電話をしおに 病院のベッドで恋の 女房の眉毛を剃って連れて テレビ買うことも仲人へ言うてまる 元旦の計まだ成らず 御希望の品値段が気 偕老はとり違えても つきあいがよくて流感までもらい 恋愛か見合か子等は 日 **姿宅への道目だけはすば** かんしよ病み飲めば盃取 ボーナスで大きくよろめいて父帰り 和はいいなすくすくビルが 隣の御用茶羽織見 一階から積 があるか年の瀬汽車 小鳥の 飯 猿 鬼は間 0 櫃 めば引 0 愛 わ 番 負 L 嬌 のびた数を読 越 聞きた れ 世 ま 切 C け 掃 役 77. 合 7 初 牙 チ 荷 y れない 冬 6 ち を 12 夜 5 友 を ŋ から 0 プで帰り 身がかなし 二月 かわ 剃 6 通 立. 出 0 から 白 む しこく 眼 重 混 差 ず ち 1) 7 1) 鐘 鏡 ŋ 35 L 7 出 Ü 4 4 兵 ń 福 岡 费 倉 大阪府 H 岡 7 以 版 古市 治 治 脉 ı‡ı 敷市 Ш 岡 辺 Ш 111 勘 711 T 県 T Tt. 73 nti 115 県 県 県 中川 小 藤 光好 遠山 三木 小倉美音 三上 青柳扇子仙 同 大前 同 室井 斉藤 同 川 同 島さぎす 富 田 八九十 ス 淀月 秀雄 陽子 義夫 鳴恍 春 吟平 ż H 雄 子

> 北風 空壜を 平凡と云う仕合せが 幸せがみつかりそう 惜しみなく奪い家裁でい 好きだから別れはなっぽ向 ウラン論炭焼小屋で エスペラント から 歌 末娘結婚」一句 売 腰にはチギの 謡 2 て 習ったけが 曲 迄 聞 流 判 ts 升 だ いて ŋ 追 がみ合 空 いてする 切 る L 手趣 来 7 か 加 差 問 来 青 案 3 Vt 着 笠岡 大阪 河内長野市 高 貝 岸和田市 知 塚 府 rfr 市 YE 井 木山 家根 內藤 同 須 同 本黒天子 J: 一美恵子 きさろ子 二路 俊江 抱亭

寝てる線もう大人で

す

Ŧi.

六

4

抬

市

越

智

水

靴下 賃搗きの音を聞きつ 大学へやっ 決算へ主任の髪は延 ビルジング蟻がはってる様に塗り 踊り子の恋かステップ踏み 千客万来妻の社交をもてあ パチンコの負けた話 どっと街へみんなボー 20 雪やおべべ汚 隣りはテレ 喋りが過ぎて借るのを忘れて来 せまる師走かつぎ屋派 へ女の線 を気にしてくれ 忙 な L ビ見ながら病な居 て嫁 ŋ < から しただけ 出 ts でウマ る 0 U た ナス受けた顔 強 催 心 ま た 年 0) 娘 手に降り があ ま 違 2 10 配 46 Š. 促 0 嫁 ٤ 恋 え L. L ま 暮 1) 3 大 西 阀 E 貝 大 岸和田市 学部 阪 胶 E 111 Z 塚 rti 與 市 市 抽 iţi T 安並 寺杣 福田 酒井 植山 木田 神田 同 同 同 同 護 同 III 十七七 花車 丹韶 祥男 武助 豊年 留三 梢 月

> 良い教師である。 華かなりし頃の「大正川柳」 大先輩で私達川柳 からのヴェテランで、 名からなる川柳グループがあ 導者木山遠二氏は井上剣花坊先生 が笠岡地区には、並木会なる十 書として、新川柳の研究に没頭し ている川柳一年生である。幸に は今勉強方法を換えて「川柳雑誌」 人」「福寿草」等などを取寄せ参考 教科書とし、句集「私達」「旅 お互に研鑚している。その 年生にとって 誠に斯道 時代 0 指 0 余 我

で、日夜川柳の道にいそしんで 建設のメンバーの一人となる覚悟 との先生とよい勉強方法によっ 自 微力ながらも「川柳王国岡山」 信を持と 杉 にもめげ 本 う 鶴

常私達は身近な事でも自分は

心 斉橋筋大丸前 電話の三三四四

陣笠で終って漫画に

to

ts

5 6 ts U

す n 0

爱

候

県

水

沁

千円釣があるかとみく

れば元の

社

h

松

T

関戶宗太郎

給を顔に塗ってもすね

かっ

ŀ ジングル とろおどり 雪国の嫁入りそりを 家柄と言われて壁 拝み屋を白ナン 天気地図日 大切な首をつまらん 貧乏も割切っ 生きんため断食もした秋も 寝言にも云うた言わ めり性に 米の飯 実 宅。"違い ングルベ 1 ンテスト芋で育 沢山夫婦 人の窓が開 ゃべり散らした空 レー 9 と理論を2で割 いが斜に なく只 # の商魂見 1 はって シに みでまか 附く見 頼 ~ な 舞庭 へ百 えない程 ルジン 金貨 小歩いてい ます子のヴァ んで今の 何んでも 炒 似 よろめき 財布 初号活字を たり 合写真を持てあま 利 せる b か 姓 7 V れ せてケ 香るも女子 Ш きまっ バーで訪 江 ナー ガ 居 て から に墓地 T た娘 間に合 IL ひもをあなお おいて店はっま 虚を風 落ちか ぬのけんかち V 事 る 連 T 大 3 等 7 モノ れ なりきれ かと 2 ね 1 ル を + П K 5 3 ば H 又 7 使 知 金が要る オリ 問わ のなる 見えず わ われる 衣きて ŋ そ T 暮 かっ 賭 か わ 6 不 ts 拝 楝 は ず 来 け 月 ŋ 倖 2 道 かい れ 2 ŋ け 3 ず 2 貝 大阪 大 大阪 爱 福 大 岸和田市 鳥 JR, 兵庫県 大津市 金沢市 大阪 杂 奈 大湖市 阿 善通寺市 天理市 広島県 少取県 阪 塚 阪 取 級 岡 渡 良県 111 良 都 市 ni 府 Ki 県 県 杉本 中 竹 同 同 谷 秋溝橋田口 中谷 矢吹 遠山 杉原 友田 河 阿部たけし 同 同 塚脇 高野 尾花 木村よしを 岡田花奈女 岩田八文銭 萬代句念坊 本南 波仲字呂 沢 野 內 田 十四呂 むじな ハナ子 よし 吟女 半子 Ŧ-好 PU 栄子 群雀 IE. 鶴 里 耐 郎

> 子の ボー

へ財布をは

たく

クリスマ

ス H

田中

狂

笠

岡市

ナスの

レコードが鳴る三カ

八

代

18

クリ オー 正 気を病んで力になっ 迷信もよし題 バックミラー美人だっ お プロフィル野菊のような君なり 正月用 月を チンコ バー ス 2 7 闇 ガ ス のドブロ の衿から へお忍び部長サ 見上 0 クにさえ遠い H げ ウイス 2 大工 7 不景気風 たつもり て 夜 包 たなと思 から キー。見 を 失 嫌 V 2 妻にち が吹 グラ KC 歩 か なり か け 10 9 貝塚市 笠岡市 大阪 K B 天理 滋 松 鹦 Ш 翼興 ir. 野 Ш ii **仲野花鶴美** 木山 永松 原 П 田 田 桃仙 卯 蜻蛤 祥月 仙 Ż 綾女 柳 道雄 印 Ш 倉 助 坊

法要で 踊子が履けば靴まで スタン 沖遠く孤独を愛しているョ 気兼する事なくなっ 税金の払い戻しを飲 よろめいて鏡のこわ 切り 絵はがきの 大資本板かこいにも 体温計すべって落ちる程に 栄転へ卦任 月までが舞台をのぞ 期も 布まで開けて ۴ サンタの める妻に 0 米問 寄附は 火鉢ひまな手を 方が良すぎた H 0 の父が 族 話 化 0 料 むか 0 K 粧はか カ は 理 値 0 おどり < 金 7 む V 元 花 V V 切 未 雨 伦 気 2 0) から 悪太郎 あ 亡 2 怠 专 P 0 5 お 芝 疲 咲 か 9 T ガ 8 居 10 5 1) 旅 V 期 1) 世 ち 九 1 ず 3 VI 1 西宫市 貝塚市 字部市 兵 西 西宫市 大阪市 七 熊 石 兜 大 広島県 島県 木 111 竅 摊 E B 16 県 市 111 鎮浪 村上 三上 村上 杉中石原田崎 永吉 松井 高瀬 鎌田 岸川 斉藤 谷本銭愚坊 松高 樋 たけ 洛強魚 喜好 芙路 道草 愛鳩 錦花 222% 球絵 俊見 秀三 幸路 銀子 漣 10

> 情熱をもやし常にたまゆぬ努力を 全没の憂目にあうとも又の機会に

進月步

先生方や

いと信じます。

ンに轡を並べる日も夢

せばめ堂々ス 諸 駄目だと思います。

たとえ

て居る人々の多い事は言うまでも 過し

のもなく曲りなりにでも消化し むつかしいと言って投げ出したも に当りますので、さほど今日まで が、全て情熱と自信を持って物事 でも前途には大きな夢と希望を秘 行く事が出来ますので益々自信を しく出来て居るのか存じま かく申す私は人間が馬 て居ります 永年ベッド生活を送る身体 鹿か厚 世 N T

若さあ 病めばとて大 志は捨 7

います。 も未熟な私達が同び 並べて居られる処へたずなさばき 生を始め、あまたベテランが響を はまさに剣豪を思わす大家・諸先 りとも投句は出来ません。 引込思案をしておりますと いにしかり自分の句など駄 信念を持つ事は作句においても大 ば全没になったとて悔はないと思 間違って居るのですから、よしん ラインに並べて見る事が始めから 寛永時代じゃございませんが だからと言って勝負は じ様にスター 目だと た 搜 1

句

される。本年 光明寺で開催 時から下寺町 会は二月七日 ▼本社二月句 (金) 午後六

コして帰った人の姿が目に 浮か とうれしい短冊を抱えてニコニ 道をバク進する人は、誰と誰か。 一月句会で三十二年度の努力賞 度の全出席街

午後二時から同病院五階会議室で 誕生日。路郎師と麻生葭乃女史出 浅草で開催。兼題。日本晴・強気・ は廿一日午後七時半から法善寺前 ▼杏林川柳会 席▼大阪逓信病院島ヶ辻川柳会 (大阪市) 句会は一月十八日(土 麻生葭乃女史出席。 (大阪市) 新春句会

であった。 数参会長時間に亘り活気ある大会 柳大会は一月十二日開催、 ▼川雑倉敷支部新年句会は一月十 ▼南海電鉄 (大阪市) 新春句会は 会。▼広島川柳会新年交歓36題川 日下関駅鉄道職員会館で開催、 ▼川雑下関支部初句会は一月十二 二日午後一時、 架下親和俱楽部で開催。路郎師選 三十日(木)午後六時半、難波駅高 相原一善居で開催 柳人多

春句会を開催、盛会。▼川雑名古 十五日午後一時創立三周年記念新 ▼川雑米子支部松露川柳会は一月

> 満氏渡米壮行句会は同支部に於て 開催、盛会。▼川雑鳥取支部河村日 社きやある初春川柳会は一月三日 盛会。▼川雑小松支部新年句会は は一月十五日池田古心居で開催 新年句会は一月十五日盛大に開催 屋支部新春句会は一月十二日開 月七日盛大に開催された。 月四日開催、盛会。▼静岡川柳 かがみ川柳社(岡山県)新年句会 盛会。▼竹原川柳会《広島県

氏以下十二名参会。 ▼川雑岡山支部新春句会は一月十 八日十三時第五鉄道寮で開催雷山

、日娯句楽居で開催。久米雄氏は 川雑備前支部新春句会は一月十

かに開催多数の柳人が参会した。 十六日午後四時寺尾有芳堂で賑や 太郎氏還暦祝賀川柳句会は十一月 川雑小松支部(石川県)山上千

健羨まされた。 始にかけて、NHK及民放AF等 会長として出演。又同氏は年末年 松山市民演芸大会に松山ユーモア 日松山商工会議所及NHK主催の 川柳講話録音四本をするなど頭 前田伍健氏(松山市)は一月五

洞会理事長が路郎師の祝辞を代読 会には(大手前会館)西尾葉不朽 祝辞を述べられた。翌十五日の大 島生々庵副主幹が路郎師の代理で (大阪市)の前日祭が一月十 番傘五十年全国川柳作家大会 心斉橋そどう七階で催され 中 74

▼正木柳建寺氏(金沢市)ら主催

になる「物故川柳人追善全国川柳

大会」は本年四月二十九日午前長

生の悲しみを味われたことであろ くことも叶わなかったと。自筆の を地上に投げただけの生 ▼ 速水真珠洞氏 (福岡市) の句碑 された。どちらも盛会であった。 簡単な報告であるが、しみじみ人 厳父の計に逢われ、その葬儀に行 ▼三鴨美笑氏 建立される。なお碑句は『土くれ が東油山の観音寺境内に二月中に 闘病生活中お気の毒にも正月二日 (米子市) はずっと

見舞われた。▼河村日満氏(鳥取 市)は一月十五日鳥取支部を代表 ▼石曾根民郎氏(松本市)は一月 かね本社に路郎主幹を訪ずれた。 十四日来阪、静養中の路郎主幹を しての見舞と同氏の渡米挨拶とを

回会合は一月十三日鳴尾の鵜汀居 呂鵜汀氏ら十名の同志で明和支 とのとと。 研究会をもつことになった。第 更らに熱意を高め橘高薫風子、 ▼川雑明和病院支部(西宮市)は 発会以来近く一周年迎えるが今回 二泊一路ワシントンを目ざす由 号で羽田空港を出発、シャトル

た。

之氏。

一頁定価四〇〇円装幀は鍋井克

祝の至り 婚、下関市上新地に新居した。 君は旧臘十二月二日目出度く結

十七日午後六時半ノースウエスト

視察のため四十日間の予定で一月 同氏はICAの招待で、労使関係

▼山根白星氏 (東京都) は東京都 元川出張所へ移転。 荒川区尾久町十丁目橋本産業KK

中京区三条通小川東入古川敬三方 ▼土守蜻蛉氏 (滋賀県) は京都市

### 住 所 改

た。著者を知る上にもっともよい 左の通り改称。 ▼ 断村 味平氏 (石川県) 刊 紹 の住所は

本社路郎主幹に宿題選評を依

ませんでしたが、夕方には素晴し を眺めました。はじめのうちは本 としていて誰の身体かわからない す寝不足の頭は何を考えても呆っ 本ではもう二十一日、時間的にも 米第一信があった。「ワシント ▼河村日満氏 (鳥取市) からの 家の私達に遠慮したのか顔を見せ ような気持です。昨日タコマ富士 途中で変更があるので変なもので に今日(二十日)着きました。日 いところを見せてくれました。」

かくしたタコマ富士 HOW,DO YOU DO 个 颜本 (日満)

国弘半休氏(広島県)長男哲男

# 称

分類方法がとられ、まず序にそえ 定本岸本水府句集が出版され 加賀市大聖寺町永

文化会館で開会することになっ 崎市延命寺で法要、正午同市国際

> る母百句、初心時代(明治四十二 第四運動にいたるまで八期の作品 年以後)から昭和二十九年以後の 六判(番傘五十年記念出版)三五 をのせている。番傘川柳社刊行四

詠草からとった。小冊子句集定価 十月の番傘句会大阪百題川柳句会 ▼川柳大阪百景。番傘川柳社発行

六四頁定価二八〇円。 三丁目二三五白珠社から刊行、一 和三十三年一月十日、豊中市本町 歌集「極光」白珠同人選集が昭

めず、 たので、不朽洞会の総会の日はき 療院階上で常任理事会が開催され 潮花の諸氏。差支えた方が多かっ た。出席者は生々庵、 (日) と日程を取決めただけで閉 办 川雑川柳まつりは七月六日 から大阪市南区三 月廿四日午後六時 休橋中島小児科診 ★常任理事会─ 栗、梅里、

# ☆会員異動

月限で退会された。 桑原養痴園氏は家事の都合上十

光好陽子氏(岡山市)正会員 江国幽谷氏(岡山市) ☆新会員紹介─ 以上久米雄氏推薦 正会員

送「お休みの前に 分から、BK第一切 こに誌上放送をする を、要望に応えて で電波にのつたもの ことにしました。 編集局

旧職十二月二十二

用がかかる訳でもなく邪魔になる訳 を生やしているからと云って別に費 近ごろはヒゲを生やす人が尠なくな もう五十三年ぐらいになると思う。 かまいなしに生やしている。ヒゲ ても流行らなくっても、いっこう たようであるが、私はヒゲが流行 私のヒゲはあんまり濃い 顔の装飾としては見馴 してみたい。私 生やしてから くショボショボヒゲなのである。 ていない。まだ二十歳になっていな の至って剛い歯ブラシにつけて、ゴ 液体をつくり、 入れ、それを火鉢にかけて真ッ黒な をしたもので、先ず卵の黄味を皿に こでヒゲを生やすために相当に苦心 まく生えてくれない。 であるからハッキリしたことは覚え かと思う。 六人か、多くて七八人ではなかっ 頃のことであるから、なかなかう もう半 それを一本一銭の毛 世紀も以前のこと 云うまでもな 2

時代に生やしたので、 のヒゲは明治三十八、

髭のことを少し談

うが、そんなことには頓着なしに、 タバコの煙りで大半は黄ろくなって まった。イヤ、 るおそれは ヒゲを生やしたまま、 わしくない職業もあったようにも思 には、ヒゲを生やしているのにふさ とうとう物になってくれ し通して来た。 しまった。いろいろな職業をした私 云うものは恐ろし 僅かで、 今ではもう散髪屋に剃り落され スッカリ白髪になってし ないが、 白髪と云うよりも、 いも 黒い部分はホン この年まで押 で、 たのであ

1 ワー大統領より五十日早く同じ病気 とであった。アメリカのアイゼン た。 の下からアゴへかけて、アゴ髯が生をふさいでしまった。それから下唇 ころが病臥しているうちに、私の口 はいつもより増したようである。 \$ 動も来たさなかった。そのうち言葉 いぶ重態だったが、私の場合は にかかり、 不足と過労の積み重なりだと云うこ 筆談でする身になった。 とが出来なくなって、 発病した。そして一切言葉を出すこ 髭は箒のように、 この十月の六日の晩に、 取り戻したし、熱も無いし、 僅か一カ月ほど病臥している間 両横の耳の下から頼ヒゲが生え スにもならなかったし、株に 大統領よりも私の方がだ 前へ垂れ下って唇 用件はすべて 原因は 私は突然 食欲 睡眠 ٤ 変 =

> 写真説明 美、坂東若芽、――後列右から、吉井那英、国府玉 前列右から一本谷すゑ子、西野俊江、田中淑

# **初曳野友の会を** 枝、増田也寿子、山本貴子、大塚青枝の皆さん。

潮

花

ケーキが役に立ったことが嬉しかった。早速 つける。お見舞に提げて行ったクリスマス 屋を飾りましたには恐縮と嬉しさが胸をしめ 心配しの真赤なカーネーションが活けてあっ スの催しがあるとかで講堂には大きなツリー た。潮花さんが来て下さるので皆喜んでお部 んが持ち込まれたツリーが飾られ、花瓶には かだった。藤本幸永さんの病室にも、 が飾られ廊下を歩く患者さん達の顔も晴れや 暮十二月二十二日、今宵は病院でもクリスマ 羽曳野に皆さんをお見舞したのは、 昨年の 若芽さ

学生でヒゲを生やすことが流行した

知らないが、私の学生時代には

ゲを生やしているのが、

あるか、ど

して

ゴシゴ

シやっ

たものである。

It

るので、

随分と痛いが、それを辛抱

る。鼻の下が真ッ赤になるほどこす シゴシと鼻の下をこすったものであ

るように思う。

今までは学生でヒ

れている加減かも知れぬが、無いよ

は有る方が少し落着きを示してく

方ではない。 でもない。

ように思う。

もっともクラスに五、

るほどの薄いヒゲだったが、熱心と ないと、ウッカリすると剃り落され じめのうちは散髪屋に一ゃことわら



ある。

明治天皇さまのおとがは頼と

は云うまでもなく、

口髭からアゴ

やすやすとはのびてくれないもので

を楽しん ゲののびる

しかし、

のばそうとなるとそう

うと思った。 そして毎日、

になって見よ

ズンムの一人 て見て、私も ひとつのばし のびるものか ら、どこまで

私はこどもの時分に明治天皇が大阪野までが実に大したものであった。

П

いので、ヒゲがボウボ 云うのは東北の寒村の二男や三男坊 を思いうかべた。東北の神武たちと た「東北の神武たち」と云う映画がった。私は寝つく一ヵ月程前に 私の想像も ヒゲがボウボウと生えて神 していない顔が出 ヒゲも剃らな

がえだに深 争は諦らめることにした。 足下へも寄りつけないことを知った ので東北のズンムたちとのヒゲの競 ズンムたちや、 行幸された時に、 深く印象づけられている。 いくら気ばっても、 明治天皇のおヒゲの 拝したので、 私

のまま剃り落 しかしこ

武天皇の容貌

似ていると

そ

書票における路部先 リストそっく が、まるでキ にとった写真 者が病気の時 と、昔、新升と とを思いつい とにした。 門下のT君が 云う歌舞伎役 故、そんなこ で記念撮影を 写真が巧いの たかと云う してもろうこ るような気が した。そこで 力がムダにな は、折角の努 してしまって

ままのばした

面白い。この る。こいつは て来たのであ それに似通っ あるが、私も う呼んだので ころから、

った。そして記念撮影が終ってから、 思い、記念撮影を思いついたのであ りに見えたので、 たちの弟ぐらいには見えるだろうと スッカリ剃り落し、 髭をていさいよく刈り込み頰ヒゲ 私も東北のズンム アゴ髯はアゴ

さんともおなじみの口髭の麻生路郎 Ł それから十二月一日に、 わして記念撮影をやってもらっ うな気がした。 れで病人らしさとヤヤ縁が切れたよ 子もだいぶよくなったので、 をもたせて刈り込むことにした。 のところに十円銅貨ほど なった。 ゲともお別れを告げ、 そして再びT君を煩 いつもの皆 からだの調 残 アゴの た。

もならないのに、 ったのである。 でも、 いるようなことをしなくなれば、人 月に押しせまって、どうにも斯うに ないものは、いかにあせろうが、 あることを知ったのであった。 力しようが、ある段階以上はムダで にゆるされるものであって、素質の はとてもく、及びもつかぬことを知 能性があるとしても、神武天皇まで ンムたちの弟ぐらいまではのびる可 云うことであった。 あとはなかなかのびるものでないと れたことは、ヒゲにかかわらず何ん 世は幸福に違いない。 こん度のヒゲの談し のびるところまで行ったら、 それは特定の人のみ もがきにもがいて 私のヒゲも、 から考えささ よそのボー 努

知ったら誰でも幸福になれるのでは しても限度のあることをハッキリと 自分のヒゲは、いくらのばそうと

男装が似合い錯覚

起 L

そう

ナスの計算をするようなことはしな

IJ

スマスツリ

いに限る。

帰られる日を今年も祈りつづける。 うした人達が一日も早く退院されて御家庭 に友の会にとっての異風でもあろう。私はこ とも、ほほ笑ましい。鏡野友の会の餅搗と共 舞われる風景も病院ならではの感じがすると 姿などと思い思いの仮装が病棟から病棟を見 子さんのお宮さん、坂東若芽さんの派手な娘 ピエロ、水谷すゑ子さんのお猿、 んの若衆、増田也寿子さんの貫一に、田中淑 あり、玉枝さんの官主さん、西野俊江さんの 皆さんと共にツリーを囲んで一枚パチリ、 メラに納る。当夜は友の会の皆さんの仮装が 山本貴子さ

# クリスマス仮裝

# 川雑婦人友の会羽曳野地

胸のことなんぞ忘れて宮たのし 丸 尾 潮 花 選

野

柾

子

ズ

黒ん坊も白衣へ少し気を ンサムな自分の顔に惚れ惚れし 使 吉 井 那 美

Щ 本 貴 子

真黒に塗って自分が恋し ts in

大塚 芳 枝

スマスツリーもてれるお宮さん

ij

增田也寿子

仮装して貫一さんが恋しゆなり

中 淑 美

ーへとこも灯が入り 玉 府 玉 枝

キリストは生きてる皆生きている 坂 東岩 芽

星の降る窓へ仮飾の娘がならび 藤 本幸 永

丸 尾 潮 花



# 初歩時代私はこうして 座

# JII

勉强し

O好敵手を持つこと

阪柳壇」が設けられ、路郎先生と も私が川柳に手を染めた初めで れ選をされていた。ふとそれを見 水府先生と毎週交互に課題を出さ す。当時投句したものの記録が残 て面白半分に投句したのがそもそ で路郎先生の選でした。 っています。「夜汽車」という題 昭和十六年頃、大阪新聞に「大

又あくび どこだろう暗をすかして

眠られずどこ迄ですかと 鴨緑江寝ながら渡る開 拓

此の夜汽車着けば大陸胸 話しかけ

乗込んだ夜汽車で明日 おどる

す。以来今日まで悪縁か因縁か けてなるかと競争を始めたので したかも知れない。糞! 弟に負

〇多読したこと。

ってないつもりだ。

もかく一歩一歩前進することを意

村 好 郎

プラン立て

す。しかしその後相変らず駄邪句 の首でも取った気持だったので 印刷になって載ったのですから鬼 ったかわかります。最後の○印が に私が川柳の何たるかを知らな って堂々投句したのですから如何 三句や四句は入選するだろうと思 せんか。これでも本人は少くとも を投句したのだから全没の続くの 入選したもので新聞に自分の名が 何と噴出しそうな句ではありま

川柳の良さを知ることが出来たの 手を持ったことが私の勉強になり まだ大万川柳会でも打倒梅里を目 血肉をわけた兄弟も川柳は別とい 標に悪戦苦闘しているので、好敵

# O嚴しい指導を受けたこと

存しています。 添削して下さったものを記念に保 らされ一句一句先生の厳しい指導 され一人一人正座の先生の前に坐 る間に先生が親しく筆で添削批判 提出するのです。席題を考えてい の松阪倶楽部で川柳講座が開始さ を受けたのである。当時の先生の ことを「川柳雑誌」の広告欄で知 れ路郎先生が直接指導されている を書店で求め読み始めた。松阪局 人に加わる動機となったので 開かれ必ず作句して来て先生に たのが恩師路郎先生の門下生の それからぼつぼつ「川柳雑誌 松阪倶楽部の川柳講座は月二

(類句あり) 辞める気で帰って みれば子の寝顔 整備令今日は課長の 結婚で辞めた筈の 椅子も消え 辞職して故郷の空 ビルに居る 胸を張り から

た。もし梅里の句を発見しなか、 里の句を見付けアッと驚きまし は勿論です。或時同じ欄に松江梅

たら私の川柳もこの儘でストップ

れたところ。 せぬと教えら 稍可」と。 チェックは 縦線は感心 ( ) は先

生の朱筆で書 いて頂いたと

ころ

私などはま

られた姿がまだ私の瞳に残ってい 歩だったのでやさしく手解き程度 熱に接したことが急速に川柳の有 の直々の御指導と先輩諸氏の作句 れ、或は喜び或は平身低頭してい 毎回手厳しい批評叱責を受けら だったが、生々庵氏、古方氏等は だほんとの初 一氏等多士済々にて私が先生のこ 古方氏の外に普天、香林、 この講座を受けたものは生々

不

出である。 如何に大切であるかを思えばこの 講座は私にとって実に懐しい思い 鎖されたが良き指導者に師事し体 難さを悟らされ、上達の力にな あたりの指導鞭撻を受けることが た。戦争苛烈になって講座は閉

安産のく ワダカルシュームは妊娠中なるビタミン入小粒二〇〇円 く早目からおのみ下さい。

いる。 句佳句と思った句は書き残し繰返 柳に関する単行本、雑誌はことご に勉強になったと今でも実行して く深く読むことに勉めたことが大 心が魅かれた。私は作句以上に広 好きで其の時分から水客氏の句に し読みそれが楽しみだった。当 とく買いむさぼるように読み、名 爾来私は古本屋へ飛込んでは川 五葉、豆秋氏等の軽妙な句が

時代を繰返している。 ある句を創られそうでなく、 まだ初歩だ、まだ初歩だと、と まだ年期も浅いし、とても生命

### 須 崎 豆 秋

風雨となって来た。 くも現われて、風速十五米余の暴 たが、台風十五号の前触れが、早 船員とともに、イカ釣りをしてい 畑という青年船長は、二十五人の じ津軽海峡で、イカ釣り漁船の田 丸事件のあった前夜、ところも同 千余人の人命が奪われた洞爺

まれそうになるのがあるかと思え 百羽もあろうキビタキは、彼にの るように、同船の百ボルト八千ワ ットの全照明をつけた、見ると数 るくしてやるぞ」と鳥に話しかけ 向もわからないだろう、今すぐ明 うに、光がなくては飛んで行く方 れる。田畑船長は「おうかわいそ き消されながらもはっきり聞きと ますと荒れくるう風や波の音にか 近くに数限りなく聞えてくる、 声がきとえてきた。高く低く遠く ピッ」と聞き覚えのある鳥の鳴き どこからともなく「ビッピッピッピッ 員に伝えた、ちょうどその頃だ、 大畑港(青森県)へ帰ることを全 「あっそうだキビタキだ」耳をす 船員の生命を預る田畑船長も、 に応えて涙を流しました。 情の記事を読んだ時は、ぐっと胸 の紙面を汚している際でもあった

いうようなきたない活字で、新聞 喜こび勇んで羽ばたいて行った」。 キたちは港裏の山はだめがけて、 やがて大畑港に無事入港、キビタ はあわれな鳥たちを守り通した、 いか」と矢の催促、だが田畑船長 う、鳥なんかどうでもいいじゃな 覚めた船員は「オイ船長早く帰ろ カジを握り全船員の生命を守りな ている、田畑船長は一人シッカと 万事をまかせて、死んだように寝 業のため船員たちは、ただ船長に ぶ、船は波ではげしくゆれる、イ ちは一斉に船の回りにつき、うれ の灯につかせるためだった、鳥た がら鳥たちを誘導する、やがて目 をグッと落した、鳥を静かに同船 田畑船長は帰港する船のスピード カ漁期で連日連夜不眠不休での操 しそうにピッピッと鳴きながら飛 殺人、強盗、汚戦、暴力、…と 息も絶え絶えのものもある、

> を総動員して、ツバメを乗せアル ず、バタバタと凍え死んでゆく、 を襲って、ツバメたちが南へ渡れ 年の秋、不意の寒波がヨーロッパ 運んでやった」。 プスを越えて暖かい地中海々岸 その時オーストリア政府が旅客機 又こんな話もあります、 「ある

どん栗ほどな輪をして見せてくれ タポタと落ちた涙の大きさを指で 紙がズブ濡れになりおった」とボ の原稿を書いとった時に、涙がと に発表した「映画智恵子抄を観て」 うがおまへん、どしたんでっしゃ ぞ」といつもながらの愛情のこも めどなくポタポタと落ちて、原稿 を要するぞ、而し俺も川雑九月号 ろ」と話題を切替えたところが、 私近頃美談をきくと涙が出てしょ 頭が熱くなって来て、眼鏡を外す の上へ坐ったままなかなかのお元 したりして居ましたが、「先生、 舞にお訪ねしました、先生は蒲団 「豆秋、それちょっと医学上警戒 った御教訓をいただき、何やら目 る愛情美談ではありませんか。 先日、路郎先生の御病気をお見 「豆秋しっかりせなあかん

したか、それは夫婦愛の至純さに 胸を打たれたからである。 の涙をとめどもなくポタポタと落 映画を観て何故先生がどん栗ほど 「智恵子抄」のような淡々たる

し、この田畑船長が鳥に寄せた愛

せんか。

た「愛情の句」だと思って居りま いうものは、構えず自然に湧き出 川柳でも大衆の胸を打つ作品と 間の愛情にとどまらず、犬、

郎先生の句では から少し列記して見ます、 くさん控えて居りますが、その中 私は感銘深い「愛情の句」をた 先ず路

どちらも心温たまり胸を打たれ

のは、何べん読み返しても、心が 温たまって気持がいいではありま その外の中から拾いますと 南無女房乳を呑ませに化けてこい よく緩れば緩るとて覗く枕蚊帳 寝ていても団扇のうごく親心 よく知られている句では こういう「愛情の句」というも 古句にもたくさんありますが、 子でも 子を死なし学校に子の多いこと 妻や待たん靴音を高めんか 俺に似よ俺に似るなと子を思ひ 親子とはいいなネヅモの親 酌いでやり わるいことばかりはないと 逢うて来たのに母寒かろう 他になし ひしと抱き寄せるもの子の 寒かろう 牛耕 多喜女 庸 司

れた句ばかりですが、私のは対人 たず、ただ自然に湧いたままに生 が、これらの句は何事の意識を持 情の句」が割合に多いようです 私も私の句帳を見ますと、「愛

ほえましく思って居ます。 及んで居るようで、自分ながらほ 雀、虫、植物、…路傍の石にまで お粗末ですが少しならべて見る

愛犬の死んだ時に作った句に 天国ヘトボトボ行くか尾を

うちの犬だけが鳴かない夜

不足の際の句には というのがあり、 となり 戦直後食糧

戦災孤児に寄せて が無い ワンワンよ気の毒ながら米

靴みがく ちちははにめぐりあいたや 虫が鳴く トトさんもカカさんもなし

などというのがあります。 又、 気の毒な戦死者に対しては 慕石の輜重二等兵悲し

期待いたします。 生の名句「俺に似よ…」につづく からざる心の食糧であるところの と判らんような難解なものをねら 作れる筈と思いますので、路郎先 る句材でもありますから、安易に 身辺近くにいくらでも転がってい ったりしなくとも、人生に缺くべ 「愛情の句」がたくさん出ずる様 「愛情」こそは、われわれの日常 川柳の素材は、説明して貰わん



# 富 哑

源頼朝は、義朝

の第三子

子に謀殺され、 曆元年(一一六〇)二月九 られた。 て、 て、 で 六波羅に送られた。 ために、近江で捕えられて、 日、平頼盛の部下、平宗清の 山里に隠まわれていたが、永 頼朝は、翌春まで、美濃の 、業朝の手にかかって果、義朝の手にかかって果のよい。 ないの (豪朝は、 翌永暦元年正月 (義朝の項で既述) 翌永暦元年正

生れた。小山政光の妻、山内範の娘を母として、季範邸で

四月八日、熱田大宮司藤原季 久安三年丁卯 (一一四七) 義経と九人兄弟であった。 門、希義、範頼、全成、義圓 で、兄は養平、朝長、弟は義

妻、三善康信の伯母、などを首藤俊通の妻、比企掃部允の 乳母として、父義朝のもとに

の、池の禅尼の命乞いによっその時、斬られようとした いる。 二十日に、京都を出立して、 蛭島へ遠流ときまった。三月 て、死一等を減じて、伊豆国 この辺から川柳に詠まれて

とも詠まれている。

V

誹風柳多留拾遺(今井)

大一五(八五〇)

で、従五位下、兵衛佐になっられた。その十二月、平治のられた。その十二月、平治のり、六月に、内の蔵人に任ぜ

平治元年正月に、

右将監とな

才で、皇后少進になった。翌

保元三年(一一五八)十二

頼朝はうみの恩より池の恩 入道もぐっと見こして伊豆へ (タル一〇五)

行にはぐれた。 に東国へ落ちたが、 長と共に、父義朝に従い戦っ

敗戦となり、父兄と共

ひとり一

頼朝初陣で、兄義平、朝

類別はうみより 豆の海 よりまだ深い池の恩 深い池の恩 (タル六六)

**分別の外に入道子をたすけ** 頼朝は後家にぞっこんのみて (タル一二七) (拾五)

窮鳥を古巣へ帰す池の慈悲 (拾五)

いる。この助命には、はじなどと、禅尼の助命を詠んで したようで、 捕えた平彌兵衛宗清も尽力 すけどのは兵衛が上でもった (タル一六一)

よって、二十年後に、石橋山という何も見え、この助命に びた。それで、 の旗挙となり、遂に平家は亡 わけのよい男は弥平兵衛なり (万安七) (拾五)

いらぬ事 門の仇は禅尼の慈悲から出 池の 禅尼が子ぼんの (タル五三) (タル四一)

して、島洲を作っている地点 山村に在って、狩野川が環流 というのは、静岡県田方郡韮 である。

大そうな蛭ケ小島の袖頭 (拾六)

で而も倚順次高騰して居るのは川 出品され、 ある。一月十五日発行の古書目録 柳研究家が増加したことを示すも されて居るが、何れも非常に高値 ので川柳人として喜ばしい次第で 古書目録にも相当掲載 柳誌が古書展によく 最近、川柳書や川

川柳吉原志 (増補版) (二、五〇〇)

III 柳江戸砂子(元版 明四五(二、五〇〇)

柳語彙(宮武外骨) 大二(一、1100)

禅尼の慈悲は一門の仇となり

川柳江戸名物(西原) 柳江 大一四(一、1100) 戸歌舞伎(西原)

柳集(国民文庫) 大一三(五八〇

暴騰ぶりで川柳語彙などは一年前 など掲載されて居るが、驚くべき 大二(八五〇)

柳から見た上野浅草(三五〇)川

長 野 文 庙

本として何処の古本屋にもゴロゴ 第である。柳多留拾遺などは特価 二、五〇〇もするとは驚き入る次 で古書展で買ったのだが、現在 ら私は昭和二十六年に二百五十円 には二百円位だったし、江戸砂子 川柳(一、八〇〇)腓風柳樽通釈 柳岡場所考(一、五〇〇)謡曲と れ返って物がいえない。その他川 で落札されその高価にびっくりし 入手し難い、川柳吉原志が一昨年 方である。 上もするのだから川柳人の方が呆 たものであるが、それが二千円以 の秋松山の古書展に出た時八百円 (三十二、 転って居たのだが、今では中々 000)も高くなった

柳きやり三十冊(一、〇〇〇)川 出品されてカッコ内の値で業者が 高騰して居るだろう。 買ったものだから、この値段で買 うことは出来ないが、 江戸貨幣文化 (二五〇) 雑誌川 尙左の川柳書は何れも古書展 に 現在は更に

製の感電話に眼でもあったよう

幸

永

運ちやんの機転響

祭へ回

ボシャッとしとるが女将は刑事と見

六感をおさえて馬鹿になりおおせ

若

芽

六感に<br />
閣屋一汽車おくれ<br />
て<br />
出

周

甫

ハハアンと大感に 北 た ヌーボーでいてせん細な感をもち

女

六感が麻痺状態で よく 肥

BH

茶

課 題

六感

麻

生

葭

泥

重姫と恋をして、子が出来たけられていた時、祐親の娘八 殺し、頼朝を追出した。 が、祐親は怒って、その子を んな句も作られている。 たと伝えられているので、 頼朝の頭は、特に大きかっ 色をば伊東の館に御座の時

などと、 そこで頼朝 川柳に作られてい 北条時政

よい聟を伊東入道とりはぐり

(タル七)

(タル十三)

びりごとで伊東の館をおしく

伊東めはやぼと北条申上げ (タル一五一)

たよった。

政子と恋愛状態になった。 ここでもまた、時政の長女 時政はしらん顔がきつい好き おもふ胸あって時政ちちくら 万安七 (拾五)

とあるように、時政は、政子 て、相背くべくはなかりけり」 らでは、其人なしと思ひけれ ば、上には恨むる様にもてなし 謀ある者と見てければ、時政な みてけり。兵衛佐も賢人にて、 勢を見てければ、後には深く憑 に恐れて、兼隆を婿に取るとい 北条四郎時政は、上には世間 兵衛佐(順朝)の心の

> 豆権現にかくれた。そうし て、頼朝と結婚したのであっ の場所から政子は逃げて、伊 したのであったが、その婚礼 伊豆目代山本兼隆と婚約

里心始終あったは政子なり 取替へた夢も鏡も天下一 (タル八二)

相州の銲佐殿はきつい事 いい夢を政子御前は買あてる (タル四〇) (タル四一)

北条も娘にや紋をかへてつけ (タル三六、一〇一)

時政は、 平貞盛の子維時か (拾五)

> うになった。 武力とが頼朝に提供されるよ 勢力を持つ、北条氏の財力と ついた。そして、北伊豆に大 このようにして、頼朝と結び って、則ち平家である。が、 ら出たといわれる北条氏であ

を詠んで、 の夫を持ったのであった。時 に頼朝三十四才、政子は二十 また、政子は、正に日本一 川柳は、また頼朝の大頭

等の句が見える。 いいいいと下はちがうと政子

いと思います。

非蔵書にし度いので御譲り下さる 方があれば五百円で頒けて頂き度

るが、現在今治市に一部しかなく

(西原一穂氏蔵) 借読したが、是

たもので窪田而笑子氏の句集であ

この本は昭和四年松山で発行され

草紙 (二八〇) 川柳雑俳集 (二〇 川柳十二ヶ月(三五〇)なるほど 〇) 川柳俗説史 (二〇〇) など取 (八〇〇) 現代川柳大観(六〇〇

柳史講話 (六〇〇) 川柳年中行事

比べてもまだまだ安い方かも知れ

ない。とに角最近の川柳書の暴騰

政子御前の迷惑な膝まくら

あったら古書展が大騒ぎである。 十銭前田伍健著)を探して居る。 は物凄くて薄っぺらな川柳書でも 尚私は、川柳一糸集(定価八

約八十倍の訳であるが、諸物価と 合であるから定価三十銭のもので ったが、これは一冊二十五円の割 業者から負けて貰って三千円で買 年から十年間合本の拾いものを同 引きがあった。 去年の夏、私は川柳雑誌、昭和四

恋人の第六感がう れ し い 六感も七感もはしりおそれられ 六感が二号の住居つきと め 妻の六感逢いにゆくのを知っていて 娘の電話母の六感恋と知 六感で好感持てる 人 に 見 ピンと来るものを感じて嫁いで来 母ちゃんの六感田舎から届く幸 六感を胸にたたんでこわ 病人の六感医者の眼でわ かしわ屋の鶏六感を如何 せん 六感は次に出来てるひとを知り 質屋の六感警察へ電話する 愛情が第六感をにぶらせる 今去んだお客の札をすかして見 へ感を信じ言訳う けっ かり 千代美 銀 きさ子 丢 スミ子 ひさみ 俊 子子枝喜 江 六感の口惜しく巻いた腕

母の六感オールドミスにしてしまい 六感の刑事ゆっくりお茶をのみ 六感もあてにはならぬ宝 くじ 六感動かしたが無駄となり 何となく虫が知らせた夫の事故 六感で判った夫の 昨日 今 六感へまだ衰えぬ 刑事の 六感を信じ濃霧を夜汽車 往 六感へ電話の声がピンと 来る 六感にピッと応えた死の 予 告 相惚れとみぬいてそっと席はずす 六感でママの行先 探し 六感へ来てくれそうな門を開け 六感へ神棚の位置変えて病 ハ感も働かさぬ程 妻 は 老 出 時 け 眼 計 奈良子 雅佐女 風の子 史 子 知恵美 花奈女 都詩子 たつよ 女

空

## 壜

### 長 野 文 庫 選

空壜が明るみへ出 空壜の中で地団駄ふむバ 空壜の型にひかれて捨て惜しみ 空壜に腕をふるっ 空壜を貯め始めたら値が **操空にせねば帰らぬ客が** 間に合せと云う空壜に花を活け コレクション空場大事にかぞっとき た 3 大 池 2 下 0 寄 掃 3 坊 0 0 除 七面山 雄 蜻 祥 R 俊 蛤 額 見 峰 倉 月 T

> 空壜を売っても一度飲むつもり 空壜の数が酔ざめ腑におち

満 漣

大の字の横にしずくも無い酒壜

舟

天

涯

蛙 遊 秋

h

空場にたまる楽しいヘチ 空場の底を屑屋は 透 角びんが空いて大阪駅に 空壜も二度のつとめに化粧され 空壜『蜘蛛の巣つけたまま売られ 空場が雑居もしてる文土 取っときを空壜にして友は去に 空壜は行先知らぬ 浮 L 3 降 な て見 沈 7 10 3 水 0 すみ江 進之助 薫風子 するむ 東 牧 淀 雨 月

瞳に欲しい て見 不 6 若 そ 3 倖 すみ江 豐 葭 褶 路 年 雲 路 思い出の空壜もある 空壜のふえつつ禿げるかみの素 空壜が並んで店が 地蔵尊サイダー瓶へ花か 花見 酒空 壜 飛んでけりとなり 珍客へ裏から空壜かかえ 女中部屋花が牛乳

大阪市東区常韓町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社

空壜は喧

一

応

其

と

云

て

あ う

看護婦に悪い空壜見つ 滝鹿が空壜一つも

け

7

30

3

酔眼に未だ空壜をすかし 空壜の方が子供の

PTAの企画空壜 空壜になって子供に用が 化粧壜捨てるに惜 寄 1,5 世 る あ 色 10 宗太郎 恒 ン十 持 雄

空壜を握りチンピラ見栄を切り

虹

要

これきりの空壜と 薬 空壜

ts 元

れ

水

薬

かみの素空を並べてあきらめる

朗

ある丈けは飲みなと壜の底をふり

光

**PR** 

葵 実 不 真

)空壜で割れれば同情されぬなり 空壜も入れて出て行く市 空壜でよかった派手な音で割 まだ飲む気空壜フラフラ持つて来る 交番の花空壜につ 名幹事空壜 ままごとに空壜みんな持ち出され 空壜をアクセサリーにする洋間 代 を 差 0 ま 引 場 か 十九平 三林坊 主 E 男 敏 丘 奇 半分は空壜もある 空壜は飲まない方が持ち 一壜のリズムも入れて馬鹿騒ぎ ,: 1 0 步 棚 辰 進 始 雨

タチカワ画飯

空壜となれば特級も同じ 空壜の花枯れたま 呂律もう廻らず一升壜こ フランス製なので空壜かざっとく 活気 壜 ま 大 独 掃 ぎ 3 2 0 咲 0 出 去 1 除 n 40 げ たけお 图 薨 木 愛 定 淀 谷 月 月 魚 鳩 月 品質優良 

### IF. Va 日本 川 語

との関係から「女事務員」のことだろう かった時はめんくらったものです。 りました。川柳が短詩型として省略の宿 と推測しましたが釈然としないものが残 スガールの略」」の方が用語としては正し しろ「女子社員」なり「B・G(ビジネ を感じるまでに慣らされていますが、 でに「女事務」という語からある雰囲気 が、川柳人以外でこの言葉をすぐ理解 命を負うのはいたしかたがないのです いようです。 きる人は少いことでしょう。私たちはす 私は作句を始めてまだ間もないのです 最初「女事務」という言葉にぶっつ 生 前後

を ばしば見受けます。 これとは逆に定律を保つためか化粧室 「トイレー」として使用する場合をし 「トイレット」

空壜のきりよう一輪活けさせる

満

空壜を提げて幹事は後で

乗

1) 意 H

凡

茶

佳

)空壜を片づけ乍ら愚痴を云い

高

史 声

酔 6

客 空

ま 壜

た 緣

転

文 秋

特級の空壜

۲

Z

は 座

Ŀ. かる

得 白

光 潮 年 舟

住

)空壜が邪魔物にな

3

帰

0

雄

空壜に母さんの趣味花を

活

け 話

秀

空壜の模様を子供捨て切

れ

佳

(住)見栄を張るための空壜とは知らず

九呂平

0 態

0

空壜が道具に代り

空壜を並べ

景気

0

ょ

62

庸

佑

空壜はまま子の様

K 45 孤

扱 4 独

わ 乳 な

れ 屋 0

空壜に朝日まぶし 空壜を枕に 回り道きつう口説かれ口説かれて 回り道うどんのうまい店があり 回り道此処は気分で飲むところ

夜

潮

漣

不

(天)空壜になる程こんな使い (人)ビール瓶以下は引越し置いてゅき (地)空壜も並べてマダム虚勢 (住)二人の最後空壜丈 け (軸)空壜のように 停 年 が 扱 みち 張 知 わ 0 19 れ 三四四 九呂平 三林坊 康 郎

### П 道

### 中 村 九 呂 平

選

回り道して遭難のニュース聞き 回り道せずに帰れと燗をつ 古里はよいよい回り道をす 回り道ことまで逃げた息をつき 急がば回れと故参道かえず 告白を云いそびれてまた回り道 回り道して人生が 分り 想い出があるから回り道もする 回り道ちょいちょい実家へ借りに行き 回らしておいて土工の配 回り道しないで来いと二号言い 酔ざめを養子は遠 子を連れて地下道回る御 追いかけた犬回り道してもどり 石投げる子が居る子等の回り道 朝帰り回り道 赤線を遠く数 反り橋をもう渡れない齢になり り道ばかりではない遅 0 後 3 師は L 姿 て出 < 回 口 回 れ 動 か 0 休 0 0 堂 け 様 3 0 3 L 道 道 道 筋 麦太楼 八九十 よし子 むじな 十九平 卯之助 圭井堂 三四郎 幽 紋 恒 光 舟 義 淀 丹 愛 庸 遊 雄 郎 夫 月 謡 鳩 佑 維

> なんとなく回り道しただけの恋 回り道聞きしにまさる暗 陳情の上首尾紅茶 延びのびの借りが気になる回り道 遠回り夜道は怖い灯がとも あの頃が回り道だったと気づく年 出迎えが回り道して街を 結局は回り道した 回り道したのが一人生き 野良犬が無気味に見えた回り道 お上りと知るタクシーの回り道 回り道した姿宅で 回り道浮気の虫が まだあった予算へバスも回り道 吠えられぬように酔ってる回り道 回り道此処も地盤の顔を 回り道逢う楽しさを長引 方が 雨 承 回 10 知 せ 出 か 1 13 残 あ 1/2 勝 道 道 0 0 ず 85 5 世 仲字呂 黒天子 惠 鵜 厳 凡 実 雄 井 高 E 蜻 幽 堯 笑 薬 朗 志 倉 蛤 男 光 汀 蛙 谷 太 (天)せっかちの夫婦で回り道 住 (人)回り道しても待ってた赤い羽根 住 (住)拗ねて出た日にはまはり道して帰り 住 (佳)自転車でぼろい話 (住)回り道してもやっぱり泥がはね (佳)ただ顔を見るだけでいい回り道 (佳)回り道未練すてるに近かすぎる (佳)肩車かじをとられ 地) 日上手回り道して買いに 住)顔のきくのれんが回り道をさせ )訪問の飯時をはずした回 )回り道堀り出し物を見付けて来 )回り道尼僧の話き 回り道すれば別れが倚つ 別に相談したわけでなし回り道 回り道君子酒屋へ 回り道のわけをニヤニヤ尋ねられ

回

10

道

甫 文

秋

波

る回り道

隆

大阪ないしる 色 龍 紙 丹主月岩 電南七二、七二二 A 短 田田 册 嫌 声

回り道して人生の

裹

b

知

1

回り道さして眺めも売る 話し対手にされて思わぬ回り道

茶

店

同

球 留 不 芳 舟

回り道アベック同士ふりかえり 回り道名もない橋を渡り き 近道を間違えたらしい回 回り道そろそろキッスもしたい仲

仙

り道

代仕男

豊

10

回り道もいいさ汚峨の出来ぬ僕

用いることは正しい用法とはいえないと 「トイレ」と略すこと自体問題があるの すが、これも無理なようです。 思います。 ですが、まして「トイレー」を長音にして 「とォ」と二音に読まされる方がありま 同じ理由から手や戸を「てェ」

近

寄

す

どんたく 鶴

恵二朗

七面山

t

な

が 0 5 3

3 道

三林坊

忠

進之助

りがなの乱用がめだち、助詞にも「は」 タコト的用法はやめたいものです。動詞 は触れないことにします。 や助動詞にも活用形の間違った使用や送 が、連体形の正しいあり方は「大きい」 な」といった種類の使い方があります 「見」「君」等の慣用についてはここで 「を」特に「へ」の誤りがあります。 黄いろい」であって、特殊な場合以外カ 形容詞においても「大きな」「黄いろ

宗太郎

梢

月

凡

茶

用漢字や新かなづかいがみごとに無視さ と思います。 れていることは別の問題として考えたい は慎しまだければいけないでしょう。当 る言葉を、不用意に川柳に持ち出すこと が、だからといって日常誤って使ってい に生命を与えるため異論はないのです 然な修飾、接続があります。 言や俗語を使って作句することは、川柳 も、不必要な口語と文語の混合や、 単語ばかりでなく一句を通 もちろん方 じてみて 不自

来

3

句念坊

あると思います。 文芸に関与するものの義務であり使命で うこと、用語の乱脈を正すことは私たち せるものがあります。美しい日本語を使 すが、最近の日本語の混乱は目をおおわす。すでに識者によって指摘されていま 国語を軽視して栄えた民族はないので であるから、こむずかしい理屈はごめんわれわれは趣味として作句しているの だという意見も成り立つのですが、古来 御費同をたまわ ればさ



# 水

ら徒歩二三分で行ける。 見え 豆腐屋がつかめば豆腐堅く 一三夫

# 駒形どぜう

店が繁昌しているのは、江戸っ子

江戸独得の料理を自慢するこの

豆腐だけを専門にしている店がこ

東京の沢山ある料理屋のなかで

豆腐屋の煙日の出へゆらぐ

縁之助

根岸の笹の雪

の根岸の笹の雪。

主は五代目。 とに百四十年の歴史をもつ店、当 店かとうなずく人も多いと思う。 のどぜう」といえば、ああ、あの る人は少ないだろうけれど「駒形 隅田川のほとり、駒形橋のたも 駒形の「越後屋」といっても知 り上り ぶちあけたどぜう少うし盛 郎

うをまず、酒の中につけて骨をや のしょう油、みりん、砂糖の味 で、たっぷりのねぎとともに濃目 仕上げは一人前ずつの小鍋立て に、うすい味噌汁で下煮をして、 わらかにさせ、くさみをぬくため るといっている。 が、客の好みで、柳川や蒲焼もや 割いて売るなというのが家憲だ 名物「どぜう鍋」は生きたどぜ 「どぜう」の味は丸煮に限る、

類の料理を出す、その中で「あん

で押し通していたが、今では七種

昔はあんかけ豆腐と焼のりだけ

の器に入れて出してくれる。 かけ豆腐」だけは昔の通り「二つ」 前をつける程、この店の豆腐料理

新作の豆腐料理に「笹の雪」と名

は有名である。

れたものだという、料理の先生が

を承ったため、輪王寺宮より下さ し豆腐を発明して、東叡山の御用 名の「笹の雪」は初代主人が絹ご

今の当主は九代目という、店の

る。酒のつき出しに出る「どぜう」 の佃煮もうまい。 薬味には粉山椒や七味がそえてあ

まだまだ東京にはうまいものをた 東北地方へ足をのばしたいと思っ のきやり吟社を訪問して、次は、 雀郎先生の丹若会、村田周魚先生 上三太郎先生の「川柳研究」前田 ねばならないので、この位で東京 にとっては貴重な事と思う。 ている。 でに、東京柳壇の三つの老舗、川 を去る事にする、東京に来たつい 全国を廻る名物行脚の旅をつづけ べさしてくれる処も沢山あるが、 どぜう屋を逃げてどぜうは どうする気

れ 七面山 七面山 七面山 見送りの 見送りも一緒に走る忙しさ 一人は座席取る役 以下次号 ひか平

う。ところは上野公園の鶯谷駅かで、舌ざわりのなめらかさは一度

ところは上野公園の鶯谷駅か

客は自分で煮ながらたべる、

る。豆腐は全部自家製の絹ごし

ョーの味をとりいれた料理もあ

茶わんむしに、銀あんかけ、コシ

也豆腐」とよぶ、豆腐をあらった

## 川 雜淀 川支部と

に幾つかの支部に分れた時に誕生 たのが川雑淀川支部である。 戦前に川雑神津支部長をして居 雑北大阪支部が発展的解消し

り、又各選者が都合のため欠席し 村の三氏で例会をやった事もあ けている。時には香林、若菜、花 現在まで支部句会の灯を点しつづ 代の淀川支部長を兼任された。 もあった。 て、本社句会のように毎月欠さず て選の出来る出席者が私一人の時 (いのちある句)を彼岸とし

部も、今では若本多久志、加納山 な顔ぶれに発展した。 斉木美州、小島さぎす諸氏の賑か 水野水茶、 部三十郎、小林文児、早川清生、 茶花、坂田東洋男、志水礼司、岡 木村水堂の四名で発足した淀川支 武部香林、同若菜、西森花村、 こうした人々の参加も香林氏の 中村茂夫、小林山舟、

の情熱をそそがれている川柳の社 尙古稀の老骨に鞭打たれて、 烈々 が、しかし、麻生路郎先生がいま 創れ)の趣意に悖るかも知れない う。路郎先生の(いのちある句を 本社句会部でもお気付きの事と思 八格によるところ大である。 淀川支部は低調な句が多いと、

られた武部香林氏が、当時川柳不 洞会副理事長の激務にあったが初 木 村 水

る。 生の本意に通じていると信じてい間陶冶の詩)と喝破された路郎先 会を……。これは、川柳とは(人 もらって我々の周囲から明るい社 らい、川柳を削る楽しさを味って と思っている。 人でも多く川柳に親しんでも

川支部の灯は今後共ちえつづける限り、香林氏を中心にして川雑淀 もある。 林氏から後を託された私の使命で であろう。またそうすることが香 映る。光輝あろ川柳雑誌社のある 香林氏の姿は私の眼には神々しく して、不自由な躰で後輩の指導 に、川柳に日夜精進して居られる 路郎先生の理想を自己の理想と

ている。氏はそれに恥ない資格を うものが出来たらその受賞者には もって居られると確信して居る。 武部香林氏が適任者であると思っ を、又東淀川区に文化功労賞とい 私は常に川柳雑誌社に功労賞





投稿規定 本社宛
本社宛
本社宛
本社宛

# 春川柳大会 (大阪市)

1月12日 午後1時

### 光 明 寺

が席題七題となる。ロクロク新年の挨拶 ご出席とあって、諸氏の顔は明るい。 が続々来会される。路郎主幹人しぶりの 1958年のスタートラインに立つ人々 七福神にあやかろうと、句会部の趣向 宇宙2年元旦という賀状も舞いこむ!

拶によって幕があく。 知れない。まずはメデタシ。 けんらんの新春句会は、西尾栗氏の挨

クラミも、本年は作句第一主義をスロー

もさせない忙しさに追いこもうというタ

ガンとする句会部のコンタンであるかも

に路郎先生のご健康、その三に中島生々 前置きされ、その一に暖い正月、その二 て、生々庵副主幹と代わられる。 庵医博の副主幹就任。川雑の雄飛を暫 本年そうそうから、喜びが三つ重ったと 「天」は晴、「没」は曇とされる氏は

を明快な口調で語られ、会場は朗らかな いにゆれる。 医師としての三十数年の豊富なご経験

きる。ご病気だったことが、知らない人 にはわからぬほどのお元気さで人波をめ ここで路郎主幹を迎える拍手が鳴りし

明·牧人·季費·一點·生々庵·高志·

奈良子・いわを・万的

33

まで門下諸氏に囲まれて残られた。 れたが、そこは人情先生、とうとう最後 な顔だけ見たら直ぐ帰えると云っておら 間も語られた。初めは、みなさんの元気 ど発病当時の筆談の悲喜劇を約二十分

はにぎやかにくりこまれた。 懇親宴の会場である「大萬」へ有志諸氏 ・一三夫諸氏の表彰もめでたくすんで、 梅志·繁雄·利武·梅里·進之助·博也 •三司 • 月都 • 多久志 • 与吕志 • 季費 • 頭に淀月・十悟・柳宏子・庸佑・いさむ 奪戦では、並いる新鋭古豪を押えて堂々 連続岡山に柳神はほほえんだのである。 た光好陽子さんが女王になられて、二年 氏。三十三年度の不朽洞賞杯は、これま のミスター、川雑となられた永松東岸子 方は岡山と、三十二年度の優勝カップ争 によって示めされたが、本年もまた、恵 岡山の東岸子、幽谷氏が恵方岡山を実力 題の披講である。昨年の新春句会には、 舞がめでたく納まると、いよいよ席、 出席者—路郎·淡舟·一三夫·与呂志 五年間連続の全出席者富岡淡舟氏を筆 吉例の後藤梅志氏の謡と丸尾潮花氏 F

正·六蘭子·都詩子·十悟·柳宏子·恒 栗・蕗児・高史・進之助・葉乙女・静馬 天郎・淀月・水堂・鵜汀・花車・千里・ 紫香·文秋·昌男·美惠子·浪速子·南 黒天子·省三·三司·默平·舟遊·圭井 井平·山水·勢三·多久志·茶仏·晃· ・すくむ・博也・春巣・良子・永断・典 · 古方 · 庸佑 · 杜的 · 竹荘 · 利武 · 青波 立児・操子・浩青・獣村・武助・梅里・ 人・幽谷・陽子・素人・美喜・いさむ・ 堂·凡九郎·雄声·漣·潮花·孤舟·字 阿茶・月都・洛風・悟朗・知恵・繁雄・ • 玲人 • 句念坊 • 葉光 • 梅志 • 東岸子 •

> 美・芙路・宏子・葭乃 兼題「 犬」 麻生葭 乃選

> > もの好きが寄附を集める役を買 もの好きにしてはあくどい写真帖

さくらより もの好き先に買うており もの好きが風邪ものかずにまた出かけ

猛犬と書いて手薄の 用心なる 大の留守たのんで市場中 漁 いたのは 使われて 接拶に大も 顔 出 す 応 姓 大の留守たのんで市場中 海 大の留守たのんで市場中 海 猛犬に注意集金負けてい 犬は今日お供の出来ぬ服と知り 猛犬に注意近所と折れ合 つり合わぬ恋名犬に許され セパードを伴れてしなよく歩かれ スピッツを見せる散歩に今朝の会い スピッツをかばうと猫が好いてすね 猛犬に月給もらう犬の番 此の処小便無用犬読 コンクールで名犬飼主儲けさせ 遠吠えをきいて帰らぬ子を思い 犬を呼ぶ悪口笛も少し吹け 捨てられている犬予約される犬 ブリンスの犬になりたい娘おり 今日あげた小犬を電話できいてやり 関人が居るので犬 も 芸 達 者 子が無くて犬は座敷の上で飼 よどれるやないかと犬を抱かえ上げ 犬小屋もベンキが匂うお 留守番を犬に頼ん で 共 b 接 85 棒 3 0 1.5 月 珍竹淀三す 知恒十 人 荘 月 司 む 恵 朗 悟 句念坊 東岸子 南天郎 念坊

### 兼題「もの好き」 北 春 巢

西

栞選

もの好きで裸になってからスター もの好きがカレンダー八つも吊って住み もの好きへ挨りを払う骨 負けてくるパチンコ指をタコにして もの好きが去って店員笑いこけ もの好きの心ぶら七面鳥をつれ 極寒をもの好きでない小 もの好きに人の手相を立ち聞きし もの好きとふり返えられる修道 一朵かいなシスターボーイとやちが好きの好きへ挨りを払う骨董屋 拁 尼 六龍子 勢十點花阿恒 三悟平車茶明瓢

> もの好きの質状成程とっている もの好きの売れない特許ばかりとり もの好きが生きて葬式してもらい 頗かむり焚火しながら糸をたれ もの好きの父へ土産を撰る苦労 土器の層集める趣味へ嫁が来ず もの好きに生やした経が役に立ち もの好きを愚痴らぬ程に妻も老い もの好きがふと真剣な恋におち もの好きと言われ会社の人気者 もの好きな奴ゃと言い言いのぞきに来 もの好きが淋しいびくへ話しかり もの好きでなった演技が認められ もの好きが賽銭箱を覗き込み もの好きがエチオピア語を習い出し もの好きは人形の子に嫁費 もの好きにもう母親はついていき もの好きに押人ベッドに改造し もの好きが変な盃買うて来る もの好きと云れの趣味とも言れれ もの好きでなしパバとして子供汽車 鑑定をしてもの好きをたしなめる 通人の舌をもの好きとも言わ 眼鏡のぞいて米に和歌を書き 春旅井井美葵雄万歌庸 音 集風平平子丘声的村佑 句念坊 美 恵 子 茶 勢省 阿葉 淡 漣 三季牧静洛旅文淡 司費人馬風風秋舟

初恋の夢とは別に木の葉 影切った時刻と夢がぴたり合 初夢を話し合うてる 走者一掃逆転勝ちのとこで覚め 初ゆめは宿直室という不正月に初ゆめ見たら犬のゆ 孫抱いて人生の夢 逆夢ということに 青雲の夢を長屋に朽ちさ ゆめに見るかあさんでうにも近かよれず L 果旅せ祝 髮

旅一浪博周勢十一越典 三速 風夫子也甫三七休舟正

姑の夢みを 朝 の 今度逢うときまで夢をしまっとき ともすれば昔の夢を追う 弱 さ 夢に泡見た東京が冷たすぎ四十の夢我ながら淋しすぎ 逆夢にしても落付けない夜汽車 夢のない生活が嫌で眉を かき あの時に君も居ったと夢 話し 夢の中いつもの僕でない 珠算塾へ通い大きな夢を 持 ち 寝小便ぎりぎりになり夢がさめ ああ夢でよかった動悸まだ止まず 捨てられた夢みて二号あわてたり 正夢やないかと厄を気にしだし 夢そっと抱いて二十の日 警察の古手矢っ張り眼が 夢にみた暮しに遠い靴を履 夢のない男と添うてこの 苦 労 灯を消して癒ってからのゆめを追い 夢をみたからとひょっこり訪ねて来 寝ては夢医者も有馬の湯る効かす 十代の大きな夢が恐ろしい ゆめに見た父はやっぱり無愛想 夢多き十九の春は よく 夢ばかりおい現実に逆ら よろめいた夢は女房にかくしとき もう夢はきれいに捨てた停年期 へそくりで裏は小さな夢を抱き 陸軍もおり海軍もおり守 彦左的存在でいる 古 手 ほめられて古手を染めたとも言えず 夢のような話に女ついてゆ 夢にみた母は素顔の母でし 原稿紙文士の夢をまだ捨 て ず い出す夢でもないのを淋しがり 給日二人の夢を合わせ に聞かさ 手 小川恒 てみ 衛な光 弱さ k わ れ 笑 吉 水美竹 鏡 子舟荘 六句い春 前念む 発 子 切 む 巣 美恵子 明選 都 詩 子 児 茶仏 柳宏子 柳宏子舟 圭井堂 幽 從 漣 里 谷 志里 声

追い抜いておたやんだった石をけり おたやんになってしょうた恋女房 おたやんの顔がとけそうな的の中 おたやんと見られたくない外を飼い おたやんも番茶も出ばな美しい おたやんを口説けば細い目が笑い お多福は所詮ひょっとこだけの恋 お多福を見そとなうてた宵の內 それからのおたやん笑わぬ日がつっき 身がりそがりしてお多福のおてもやん お多福と甲斐性なしとで恙なし お多福の一度はおこって見たい顔 おたやんでよしうまのあう女房 ひょっとことおたゃん仲よく喧嘩する おたやんの高望みもせず幸せな お多やんもやっぱり顔をよって買 お多福でんねんと新婚嬉しそう お多福と言うてあかんべしてかえり 多福の飴縦になり横になり

柳宏子

司

葉月立

児

進之助

栞

武十 昌

助悟男

サラサラと米は生活の如くとぎ

米をとぐ音へ庖丁といで や 米をとぐ術も知らない娘に育て

り

晃

まださめません。

もう大人や

我が子

おだてとき ないかと 32年度不朽洞賞杯を賭けた決戦題

ある「大人」の苦吟三分間の興奮が

杯を獲得して、本年の新春句会でそ

年の新春句会で、待望の不朽洞賞

の決戦に永久保持の栄与をになうな んてまったく夢のようです。

米白く夫嫁の愛のかわり

牧

おたやんの面の上にはおにの面 これも思召しとおたやん諦らのる おたやんの理屈も民俗学らしく おたやんの赤さぶとんも春らしく おたやんやなあと可愛いい孫を抱き お多福は笹につけられユウラユおたやんは笑いこけ笑い こ たやんは笑いこけ笑いこ H 古 牧 典 多 東 繁 方 人 正 志 子 雄

# 若本多久志選

ベテランなどと古手を\*だて上げ 道具みな古手嫁さんまで 古 手 買う方が安いバケッをなおして居

す玲舟む人遊

米の値を女房に聞いてすぐ忘れ

晃

平乍ら古手一目置かれて居 女房を古手のように言うて飲み 古い手と知りつつ話術にひつかかり 百年も生きる気古手手雕なさず 古手でも見立てがいいとほめてくれ 火事見舞古手を気の毒そうに出し 古手ばかり走る支線がよく儲け

高与一雄 志志鶴々

水陽幽 鏡 子子谷

ストリーの古手を生かす演技陣

漣

遊

相撲もう取れず評論などを書き 古手でも晴着にこもる親 の 愛

上から下まで皆セコハンでお正月

役人の古手が座る 廻り 椅子

竹茶高茶洛素勢

仏史仏風

一番目は古手ばかりで育てられ

停年のそれから古手としての職

実力をいわず古手にされている 税務署の古手に帳場まかしとき

席題「おたやん」戸田古

方選

東岸子 助

生米をかみ米屋 は話 す な米だけは実家から来る新 世 もう米がないと女房が耳打ちし 米ねらう雀仲仕は浜へ行く バンザイで新米貨車を降される 米の値も知らないように毛皮着る 屑米の団子は母が 米の値はやみの方だけ知っている 米俵つんで供米あほらしい 米五台買う地下足袋の満ちた顔 米びつはほったからしの三カ日 お土産はもう有難くない お 米櫃に米充ち不平など知らず 米洗う足袋の白さ もお 正月 米びつのことは知らない原稿紙 交番の前はやみ米 軽くさげ 米提げて当分世話になるつもり 雑炊にされて河内米不服 なり 米の白さをしみじみ知った二日酔 同じ米喰うてて力 こう 違 ハイキング米買出しに来たコース 米とぐ母 ぶ女の太い 一人食い の響が 腕 け 米 () b 凡 鵜武陽黙黙茶 巾 汀助子平平仏 東春十都静三 岸 子巣悟子馬司 六龍子 万的 晃 栞 月 漣 里 谷

わが生涯

の最

良

0

岡

永

松

東

岸

凡葉淀 九郎光月

紅一点みんなあきれる程しゃべり 盆茣蓙の紅一点は 膝 を 立 て紅一点みのりを消して立 上 り 紅一点サクラもまじる叩き売り 紅一点ちやほやされて幕になり 賞品は紅一点が持って行き 紅一点シスターボーイと間違われ 並ばせてピントを合わす紅一点だまって座りだまって帰った紅一点 窓口は紅一 紅一点意見は軽くあしら わ 紅一点中途で帰るつもり な 次会へ紅一点がじゃまになり 一点笑ってばかり返事 一点唄えばみんな拍手 一点男まさりで嫁きお くれ 点女王はこんなものかしら 点ハッキリ赤と分かって来 点しゃべって貰うマイク来る 点もててるような気にもなり 点 0 社 0 人 せ す い恒鵜庸操多春淀十水 一 牧 万 季 花 博 三 夫 人 的 贊 車 也 東岸子

### 遠来へひねり餅など米ど **席題「紅一点」** 松江梅 里 多久志

### 胸が一つぱい 岡 Ш

光 好 陽

子

紅一点意識して居る瞳がきれい 黒田節覚悟して来 た 紅 一 点 一点意外に飲ける口を 持ち 一点社長の秘書で手が出せず 一点紅一点と吞 ま される 一点へリオトローブ包うなり 

## 席題「お守り」 西いわ き

お守りも女性としての腰のゆれ お守りは何処へやったか達者な子 お守りをいくつも持って病みついけ お守りへ千円札をかくしとき 拾うたの着けてますんや守り札 お守りを償じて旅に出る 子供 お守りをはずし手術を信じ切り お守りは昔ながらの色でよ お守りの由来仲よく聞いて去に 福引の有るお守りを買うて来る お守りも倖せすぎるキャデラック お守りも添えて嬉しい心ざし お守りを受けて厄年気にならず お守りのコレクションほど腹に巻き お守りのように娘のプロマイド お守りを肌につけてて無神論 お守の腰も可愛いい七五 気やすめにつけて置きます守り札 どれにしましょうとお守り並べられ お守りが二つに割れて無事帰り お守りをいっぱいつけて母達者 お守りも自家用と言う格をみせ お守りの印刷去年と同じ物 お守りも這入ったまんま掏られて来 厄年と言うお守りを腰へ下 げ 運転の窓にゆれてるマスコット お守りへまだ迷信の断ち切れず お守りをフトたしかめる交叉点 マスコット入れて財布はいつも空 大小によってお守り値が 違い お守りをふろの中までっけて入り 十九九倍郎 省 進之助 柳宏子 博生 セ を 庵 柳宏子堂 奈良子 一三夫里 常岸子 晃 晃 仏 悟 里 馬

> お守りの古きを捨てる場所も無く 席題「長生き」 後藤梅 ばず 志 い義鵜を弘汀

# お守りにたよる子供をしかりつけ お守りを貰ってさ 程喜

長生きはしたいと菊の花を賞め 百二才邪魔くさそうな声を出し 長生きの血筋成程そんな領 長生きをほめりやお迎え待つという 長生きの記事は曾孫が読んで呉れ 来年は喜の字金婚式は秋 長生きが遠慮をしてる夜の 長生きの南無阿弥陀仏が口につき 長生きをせよと知事さん何かくれ 長生きへ通訳がいるインタービュー 長生きもよいが苦労が絶えれなり 失言は長生きせえと叩か れる 恩給のある長生きをいたわられ 長生きの秘訣おんなじものを食い 世が変り長生きするに骨が折れ 長生きの母へ見せてる五 千 円長生きをして葬儀代かせいで居 長生きをしろと惚気の腰を折り 蠅一匹まだ生きていた 南 長生きをして孫の名がややこしい 長生きの村黒潮の見えるとこ 長生きをけむたがったり祝ったり 長生きの秘訣マイクは聞きとれず 敬老会明治生れと 言う 誇 めてたいも素直にとられおばあちゃん 長生きは故郷へ帰ってする積り 阪 窓 句念坊人 都詩方佑 玲 月 昌男 1三夫 昌 陽 立竹洛 栞 .わを 栞 晃 漣 子 里 都 里 男秋 佑児荘風

腹 水谷竹 莊

お互いの腹探り合う 初 おめてたでしょうとドクトル腹を無で 腹が出たお蔭で社長と間違われ 腹一ばい食べたい胃散手にもって 今日だけは腹をたてまい屠蘇に酔い どんぶりをはら一ばい食べすぎた 説き過ぎ腹の底まで見透かされ 刘 玲 幽 蕗 + 典 + 悟正

> 腹立てぬ妻が第一気に入ら 出太っ腹半分聞いて 金 を 出 深呼吸大きな腹を出して 見 せやせぼちのくせに課長は太い腹 腹芸のうまい男で も う 課 長勝ち相撲派手に波打つ太 鼓 腹 婦人科は毎日女の腹をなで 腹のある課長で部下に親 医師と言う指がお腹の下も撫で 腹一杯食って日雇欲もなく 腹割って言えば案外わかる 人太鼓腹波打ったまま水が 入 り ぶちまけて話せば許す腹になり 腹立ちを押えていると涙が 腹空らす子がスクスクと伸びてくれ 仙台平をぎゅっとお腹がうけとめる たかる気で来た腹の中見すかされ 空き腹へしかと届いた難の ご馳走になったと腹の辺をなで 腹だけはほでいに似てる小使さん 腹切って見せ度い腹は別に持ち 新春放談で大臣の 腹 圧を気にして太い腹を 時々忘れ しまれ 出 味 竹三生利 莊司庵武 省素梅紫蕗一生高操勢 三人里香児瓢庵志子三 **圭**利 堂 武 六龍子 漣 晃

席題「金持ち」 長谷川三司

金持ちやなあと財布をのぞかれる おうようにうけて金持ちらしくみせ 寄付帳へ先ず筆頭をまかせられ さて寄付となると金持ちそっほ向き 出す段になると金持ち用が出来 金持ちの案外多い 敵 が 寄付帳へ金持並にあつか 金持ちにしてはこまかい事も言い 風体のあがらぬ方が お 金持ちがどうあろうとも僕は僕 金持ちによう似た禿に恐れ入り 金持ちの犬かしっぽも振りょうす 金持の何たべてはる痩せてはる 持ちの家にいる犬よくこえる 金持 あ わ 柳宏子 葉乙女 鵜 千 季 茶杜 汀里赞仏的悟正

> 位とすすんで、 葭乃先生選「犬」の披講も人位、 つり合わぬ恋

りが とう

広

山 田

んなうれしいことはございません。

て、すぐに声が出ませんでした。こ

と天位句が発表された時、

ハッとし

名犬に

許されず

のご声接へ御礼申上げます。 この感激を一生の夢としたい。 た。一年は夢のようにすぎ去ったが、 いただいた時は胸がつまりまし 路郎先生から全出席の賞状と短冊を

金持ちの隣にすんでひねくれる 金持ちの土蔵も壁は落ちたまま 金持ちに生れて春も秋も 風 金持ちじゃないがと太鼓腹をなる 金持ちを褒めて小金が出来かかり 金持って後家は益々ちじこまり 金持ちになって退屈な日を送り 金持ちのよろめき暇があり過ぎる 金持ちだから我がままも通る人 案外なとこに金持住んで おり 金持ちをうらやむ訳でないのがみ 握り屋と言われそろそろ金が出来 金持っていても分家という暮し 金持ちになって死相がすぐに出 金持ちの塀へへのへのだれか書き 金持ちの積りでハイヤにゆれてみる 金持ちがチンパの下駄をはいていた 金持ちへまた持って来る儲け口 金持ちがなんだと貧乏人 強 持ちになった気でいる三カ日 **浪速子** 東岸子 するむ 葉乙女 維 阿 山操 高 鬼 省 操 薬 男 三水子子光月

# 川雑 阿倍野支部句会

没句慰霊祭 菊沢小松園報 (大阪市)

くせどころちゃんと個んで社長秘書

同じくせもつ子他人と思われず 名が売れてくせも一緒いっしていま

舞稽古師匠のくせのまま 覚え 之以上のますと危い癖が あり

薫風子 柳宏子

あの顔でスター募集に行くと云う

へり

募集札女給へさんとつけてあり

決算期残業にして 彼に

逢

学問が好きで猫背のくせがつき

親と子のくせを互に見つけ合い 咳一つするにも 社長かたがあり 女房はポケットさぐるくせがっき さ社長息子の専務しかり つけ

旅利葉五悟句 念 風幸光色朗坊

切符までスラれましたに

後廻し

結

姑に切られた綱を

太い綱つけて小犬を貰

牛の首抜ける程綱引くにわか雨

貧すればぐちも小言もこぼすくせ

歌關旅利葉五悟

上役が叱られている 痛

快

御期待に次期は添います決算書

ボーナスの不満を吐いた忘年会

科学陣もうここまで来たと星を上げ よろめきも手の付けられれ五十すぎ 祭壇の上には八百屋ほど 並 霊きゆう車はんに人間はもろまんなア ライバルに慰められる落目なり 霊前に誓うた禁酒も う破 霊界に迄も科学がのぞき せめてもの慰め生きて居 慰さめてくれたが貸してくれれなり 淀川支部句会 り叩ぬき る 2 (大阪市) び れみ 六川葉堰 龍柳 子堂光子 豆文十 雅 梅 一三夫 秋秋悟芳與志

颱風に会うなと燕 見 送五分間五円の肩を 子 が 一十八まだ坊ちゃんの名で呼ばれ

部 香

出血サービスいうて売出し安くなく

アドバルン何が不足か拗ねてねる

十二月金を貸そうのビラ 拾う

東洋男

さぎす

あたま無でられている脳を忘れた児 恋の終幕地下茶房上らねばなられ 限笹を分けて二人のフィナー 病みつきは大穴当てた日を恨み

倉敷支部句会

(倉敷市)

善

選

ストーブの温くさを猫ももらいに来ストーブへ客らず編んでる女事務

林 選

> ラセン階段登れば夜霧の中の聖歌 笛鳴らして二千トッ二万トンすれちがう霧 流れくる夜霧の嘘と歩いてる

マッチばかり当る両手の市場籠

V

紫豐鳥秋尚

關次雀月平

礫 郎

田中鳥 雀選

京都支部句 会 (京都市)

決算へ夜泣きうどんを遠く聞く 忘年会誘惑したい娘に飲

まし 快

不精髯おもわず抜いた痛 痛快を満喫したら 腹 が

泣き落しだなと腕力聞いてやり

顔洗う先に募集の記事を 読 み

ゆきら

決算が済むまで二号も待たされる 泣き落し上手な方 が 出 三枚目が出て痛快な舞台 募集には美人求むと書いた 泣き落し涙なかなか出てくれず 泣き落し女は強きものと 知り 募集欄たんねんに見て職がなし 痛快に見えるだろうが命 痛快に吞んで割勘そのま がん張にけましし 筈

下関支部句会

干大根悟ったようにぶら 下 り子想屋の色鉛筆へ つ い 迷 い 予想屋の色鉛筆へつ 鉛筆の色にもあった好きこのみ 寒の月冴えて利久の音が 貧乏が寒さに強い 子 内職も更けて身にしむ隙 流行は抜きで毛糸を父が 干大根もまれるたびに味がつき て見て鉛筆ほどに生きた過去 0 石川侃流洞報 育間 温 着 澄 風 6262 茂吐一嘉椹吞詩藤陽伊 喜酔四子三 美泉規次川坊痴郎郎男 つよし

婚約は接吻だけに 線 を 引 きためらわず女キッスをして別れ

理性とはかなし唇 盗み 得ず

抱擁の胸へ素直になる 抱擁の甘さも知らず土に 桐一葉落ちて浮気の胸をつき 浮気など知らぬ夫で敷かれとり

老

龍白た夢南美只承知水七流十素 恵 児 龍 の 児 鉱 沙 世 平 美 雲 山 風 七 人

私

口説きより押しの一手を教えられ口説かれて見たいとあの妓の片えくほ

唇を重ねて淋しい人の

人妻になって寄こさぬ片 便 私には夫があると言う逃

悪り手

たつよ

喜人枝

人製を褒めれば女房背を

口説かれて見たい気持を湯に浸り

要求は無理でも聞いている浮気 浮気などしてはおれない子沢山 口説く男の瞳の中に燃えてる灯

募集ビラかんじんの給料書いてなし (下関市) 山創仙一陽幽葵鳳隆真広飴狂素笑銀風麗一春万谷方山忠一陽 水七二春子谷丘月文奇志坊風郎雷子子水善日古水大水平春子

定員の中には無太にいる 師 走

幽水清

呼び捨てにされて女房と云う気がし

大金を持てばみんながスリに見え

下っぱの悲哀呼び捨てされどうし

谷

うそも混ぜ人工衛星飛びつづけ 人工衛星の下でみるすを飲で切り

香多久志

立話びんと張って る 犬 の会食膳立って帰れば鯛が な

スリの眼を知らぬ乗客話 込

3 細

飴狂笑銀麗

人工衛星夢は何処まで伸びるやら

にしなり支部句会(大阪市) 後

以藤梅

選

塩辛い位いと父親子に味方めれをスリ善人の類で抜けない味へ新婚笑うだけ

谷丘友月奇文志坊風雷子水善茶日古

留置場も定員外と いう

乗

世

田

聞いて来た様な訓示を社長はし日雇のゆとりお好 焼 を た ベケ事務お好 焼 の 派 手 な 宴 かん りょう かん し 持 ち 日雇のゆとりお好 焼 を た べ女事務お好 焼 の 派 手 な 宴 歩いにしなびたお乳含ませる

雄敏晃青文愛堰

声子

空財布スッて三下 捕えら 幸せは呼び捨てにする人を持ち 成績を無視した親の希望 綱掛けて下りたいような十二月

れ

幽葵道鳳真降広

塩加減するにも料理の本を読

波秋子子

摘られたと云ってる奴がスりらしい

酒丈けは残して歳暮みな 廻 しお歳暮の山ため息で見て 帰 り

# 弓削支部句 会 (岡山県)

直原七面山選

そんなことでは貰い手のない娘の 箒人工衛星人類地球を去る 準 備めてこんだ欲で忙しい十 二 月 暴力の街へ声なき 声 が 満 ち 反目の店値下げして客を 取 り 反目をかくす次席 の 高 笑 い 蔭の声気にして幹事立ち 廻 り かげの声に近づく拍手の数を読み 安物の毛糸のびたままで 安すぎる毛糸やっぱり見合かせる そんなことでは買い手のない娘の 朽 千慈侃柳九ほ 流 選 里雨洞蛙平み 蘇四晃司雷 楼峰



夕食 米子支部句会 小西維 (米子市) K

へ誰かがおら 12 子 沢山 机

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

村味平

選

金策に来られ飲まれて泊られる

革ジャンパ着ればテキ屋と見られてい ウインクのきく方眼帯してしまい ジャンバーの恋は河原の石にかけ ジャンバーで御免やっしゃと遅れて来 ジャンパーの兄貴に類でしゃくられる 豊作へ精一杯にしわが伸 お寺また山を売ろかと持ちかける 紅葉今見頃と寺へ招かれる 殺生はしないお寺の 武勇伝とっくに知れている眼帯 豊作が正札のまま買って去に 豊年を祝うおもちが大き なり 難病を眼帯くたびれものがたり 山を支えるほどは死なぬなり 蠅叩き みのる 雅佐女 ひか平 ゆたか 左文字 軒 雨

### 篠山支部句会 小西無 (兵庫県) 鬼選

新婚の嬉しさ鏡に 笑い 広告につられ悲しい記事となり

偏食の子を夕食にもてあ

まし かけ

雄

恢復期

一歩一歩を嬉し

がり

小瑞小阿太一小阿 希 石川石茶志伸石茶

味もち

サラリーに役得プラスした暮し

役得の麻雀まけても土産 つき

一小阿同生

恢復期待ち兼ねている飲み仲間

役得の無賃乗車は 挙 手 役得で吞んで二次会高う つ なりたての係長もうテレビおき

0

紅

幸美み君節 喜ゆ 子江き枝枝 天邪鬼 借金を着飾って行 く 年 代議士の挨拶解散 近 う な り 解散を次点手ぐすねひいて待ち 災害へ段々役所の 医者が来てそれから粥の日が続き 解散をせよと野党につめ寄られ 二次会にある魂胆をちょっと見せ 子に借りのあるを教える年の暮 一次会がたたり父さんの二日酔 二次会へ年増の仲居が来て唄い 熱が 30 0 秋六 暮 8 花

詩

夕食後へ魚の値にはふれ ぬ 妻 夕食を野良でこん立して 帰 り 後仕末思い夕食地 味 に す る 後代末思い夕食地 味 に す る 半分も読んで広告だとわ か り

配食が夕食 になる 洋食に苦しめられ

夕食の飯台さみしはやり 夕食の母の座嫁が 来 て 変 夕食時ねらって借金取りが来る 夕食を待つ愛情も失せて ゆき 夕食の足らぬを母は茶ですませ

0

溜息の中にも明日へ持つ X 本賃 宿 隣 は 越 中 薬 本賃 宿 隣 は 越 中 薬 本 年頃の溜息 日 記

な希慌売かく望てりり

味恒光 そ と と ・ と 枝

乗着けるハイヤーに旅館皆並び

と酔

系進二數者

溜息を窓へ家出はさりげ

宇部支部句

会

(学部

散春奎無

たタ 朝

ら寝食風

ず

君節苧素

夕食後けろりと寿しがまた入り 一杯がないと夕食もの足

靖 錦 畿

木次支部句会 (島根県) 青豐実六佐 平児年男花吉水

> 林 ]1] 柳 会

> > (大阪市)

りは思い思いの荷物

忘れ物お上りさんに教え 帰ったら嫁ぐ娘も有りお上りさん

3

お上りに通天閣を先越

3

生一生阿珊一 々 枝 庵 茶 郎 伸

外泊をする療友を 眼 **金策に疲れて重い** 焼石に水の金策に ケセラセラドライ外泊して帰 頼母子を落して埋めた使 も雨 つ戸倦 0 ま開怠送 込 期 b 3 け り ハ春夏史草 ナ 子雄生葉右 没食

> 医者の目の届かぬとこで食べすぎる 昼のベル食欲そそるように鳴り

食欲も好取組の両力士 四十のやけくそ老妓になだめられ おでんやでやけくそ同志馬が合い

ドタン場で王の頭へ歩をたたき 月給日までの金策たかが 知れ ドタン場の主役なかなかきられない ドタン場は泣きの 逢引の髪を直すにトイレッ 逢引の電話フンフンフンと切り 一手と腹を据え 橋 本幸 男 方春幸 吉 村正 滩 男 村

大阪逓信 病院川柳会 (大阪市)

巣立ちゆく女名残りを惜み合 甘党はすき焼だけを食べて去に 長い名の標札旧家 宣伝機落ちて広告 広告屋大商店にし 標札の古風残した 当選をして標札も 偲 节 効 T ま ば 果 呉 < せ上れ るげる 0 替 井明 え 63 朗 迷調子 朗 呼 綾洋 朗 薬

> 333 柳会

溜め息に鏡がくもる 嫁 税務更の前で本当のため お上さんやれやれとホームにすわり込み 抜け道を抜けた途端に手錠です 抜け道を教えてもろた弱 来てほしい恢復期には誰も来ず

0

**葭** 珊枝郎

鮨と料理と酒

千日前 大劇裏アベノ橋地下映画食通街

まず両馬下して貰う初歩の駒 柔道初歩転ぶことだけ教えられ 三十年振りで役立つ初歩の本 左り前社員にかく す上機 煙草の火なかなかつかぬ上機嫌 好 郎 報

ゆで卵まだ温かい 家 出 家出して来れば都会は大きすぎ 家出とは知らずうっかり道をきま 0 貴狂 山二楽宗声郎郎山

やけくその石からへボ碁勝になり 化 111 柳 会 佐野白 (大阪市) 小報 酤

> 楽天家悔みに来ても笑わせる 楽天家空巣の腕を感心し 是非一票にしいと言いる的を出し 月末の無理した寄附が惜しくなり 強請ではない寄附帳をボスが待ち 知らぬ間に氏子になって寄附がくる あらかたは吞まれる寄 附と知って出し 見合の日忘れて仕事の楽 楽天家空巣 の 腕 を ほめられてそれから寄附を言いそびれ メモされているとは知らぬ大気層 水害へさあさあさあと寄附がより 寄附帳へ仲居としての額を書き 赤い羽根妹のように付けて呉れ 新装のメモは料理のことばかり 楽天家貸金取れぬままで 楽天家らしい巡査にほっとする 楽天家妻の道楽知らず 退職金当てに呑んでる楽天 羽曳野さぶろく会 丸尾灌 天死 逝 (大阪府) 10 花選 也寿子 淡白甲辰一兼利雅葉竹飯花京 子 舟水朗始平国武堂女梅秋車楼 紅小英柳幸玉保若 太郎 治史永枝美

兼題「俳 ★大万川柳 里 0 店 優 (第八 路郎先生選 句数五句以内

二月十五日 阿倍野区松崎町三丁目 十四回)を募る (店內揭示)

投発締句表切 大万川柳会宛

忘年杏林川柳会 一伸、一村、郷女郎、後列左經費明の中、一村、町谷・中列右から二人目、森系、小右、中列右から二人目、森系志、曹乃、阿茶、小右、中列右から二人目、森、生々塚、



鍮 晉

そ川柳が人生に本当に役立つ かどうか会世に問わんとする のうちにありました。これと 編集員へ与えられた要望事項 風習、等々が川柳によって破 あります。誤った伝統誤った らあかるくなって行けそうで い」という一項目が先生から 世紀の仕事でありましょ 「これからの問題の話し合 積極的に自分のぐるりか

> りうる羽根をしっか す。 砕さる日がくるので 育てましょう。 阿々天に舞い上

生の元気なお声朗ら ての出席ガスストー も冷たい北風を突い 私に、 徹せよと。 今年度の目標として の言葉はきびしい。 かな笑のなかに先生 情の編集部員路郎先 春の温かさ明るい表 ブに火鉢、部屋は真 で食うだけが得意の 書くのが苦手。飲ん 寒くなった。今宵 喋べるのが苦手、 編集技倆の向いに 三日前から急 編集録音をと (潮花

が戌年生れの私に本年は戌の 年、犬も歩けば式でぶっつか 下さる。なにもかも苦手だ の編集部の目標を色々御注文 1.3 先生は本年度

大きな鞭となって吾々のお尻 目の前の大きな書架の金文字 いる室内はまことにあたたか が続くがこの編集会議やして ▼大寒にはいって毎日寒い日 い。まず摂氏十八度ぐらい。 注文はなかなかはげしい。 ボーとしているが、先生の

ておく。

路

郎

(関電療

で音を立てている。 たまず頂戯するとしょう。 コーヒ

点してくださる。どうやら及 の紅梅のようにほころぶ。 前号の出来ばえを先生が採 編集部の顔が早咲き

柳のほかに飲むこともすこし 葭乃両先生とこの正月に初め ある。 (一三夫) 生へ、こんどは私が「もう少 教えてあげる』と言われた先 てど一緒にいただいた。『川 し塩をきかせましょう」とお 甘 い「ぜんざい」を路郎、

んから新春の挨拶を沢山いた ★私からも、 れを書くことがあろうと思う 理論を持っているので何 れには相当私として合理的な ことを報告しておきたい。こ 紙題字其他左左横書に改めた 出来なかったことをおわび申 だきながら、一々お返えしの を続けているのでおゆるしが いことがあるが、今なお静養 左横書にしたことだけた記 が今は便宜上世間にならって し上げる。なお、新春号か いろいろ書きた 、表

(梅志)

JII

柳雑誌社各支部

2月の句

会

うした勉強が毎日続く。 カットの組みを工夫する。 え、そこから表紙の色を考え 新聞の折込み広告を見てさ 2 所題時 所題時

東淀川

郵便局

造

句

ターミナル・補助

席

• 契約

所題時

10

日(月)六

時

句

所題時 所題時 旭町二丁目・金塚会館余技・スリル・河豚 玉出新町通一の一神様・女・道くさ 神20様日 おつくし句会 L 日(水)六 野 りり句 句 会

所題時 大道 - /二二・天王寺小学校 - 7 もり・悪友・グロッキー つもり・悪友・グロッキー

所題時

• 梅志

居

所題時

所題時 扇橋 交通局病院 印象・誇り・ヘマ 時 通局 句 会 校

所題時 難波高架下・親和俱楽部和菓子・紳士・近所 鉄句会

所題時 所題時 水島弥生町・椙原一善居小説・めし粒・一トロ・悪妻・疑 日山 句 会 口

句

所題時 所題時 久米郡久米南町四語直原を面山雪・素足・囁き・大根・ウインク目末メ切(投句のみ) 南蟹屋町・国弘半休居騒わぐ・・片道・夫婦騒わぐ・・片道・夫婦

所題時 所題時 下関の会議室で関釈大会議室で関釈大会議室

四条綴手・仲源寺十字路・太陽・嫌い 東区恩田長沢・津秋六花居落選・残り物・役得 部 都 句 句 슾 会

小説・借り物・やまき菓子店 周年記念句会 句楽 |戻り・親指・日墨 居

大森娯句楽 前 句 会

所題時

市内智頭橋畔・りいと昔・旧友・手切と昔・旧友・手切と 丁相 ち画 房

宰相山町一四二・西出一就職・ボリュウム

一栄居

所題時

啓成校裏・小谷節 取 句 枝居

9 子 (日) 句 会

所題時 熟田区金山脱教所 乱れ・手試 日(日)

名 古 屋 句 슾

JII 助生導 五 四 宰 孝 花 孝 花 大 郎 亜 綠 葭 省 二 伍 閑 雨 之 童 直愛辰六點朋守 志縣子莱方浪光天路庵 村八作鈍雨乃二郎健古迷介子 洞 小清逸菊浜楼尾布石北丸黑正石大吉,福松羽須藤白三市築川西宮井大三內前古高寺 川水見沢田川崎施井川尾川本曾西田宣田江佐崎本砂鴨岡山村垣田上阪輪藤山川沢井倉 白 恒 柳灯 松米 不方 筑 面 春 潮紫 水 民 八 水 妄梅柳豆満旋美晓夢好錦不湧形晚一北花一鋭 明子竿閥雄水正川人巢花香客郎歩車 夢里葉秋年風笑舟起郎風二三水翠郎海麗浪々 姫 黄 田 河 西 直 岸 太 森 友 間 阿 林 長 西 飯 冨 山 亀 小 野 山 大 小 小 佐 国 增 杉 吉 弘 水 尼 新 木 武 德 田下淵島万野野辻降岡根山林本口鶴西沢野弘田谷田津谷緑川下部永 夕美尋日花面南良愛貴丹万甦井竹白淡白晴交吞秋喜無史卜半耕湖井柳竹之博幽香雅

鐘秋四滴村山柳子論山子的光蛙青香舟星峯月水花由鬼葉占休民山堂慶荘助也王林美 稲岡臼岡田椙水福八木野那田木山山山益田河牟黒安石阿浜大有足若長大服家西青檀福 葉村井田村原谷田木村村谷垣村本田田永中村田木岡川形畑西崎立林谷森部本 鸠牛林夜藤一谷丁天水味光方千葉鳥季貞鳥瑞一彈枝流一胡迷芳春草三旬九富 b遊夏鉄 花耕坊潮波善水路郎堂平郎大容光荘賛女耕川哲正郎洞杉鰈窓仙錐右司楽平至を星六児 志坂伊木川清山神永菊野永藤小高吾高橋浜小津木海平藤松竹小後佐森村馬松真本下 水田達村端水川谷藤田田松井原橋郷崎本野西田口野尾井村內池藤野本上場川鍋田山 司男子悟酔峰茶郎平む郎子朗柳子人声男童々楼峰史志日古三お志水子る生的飄朗潮 児野中建有 安 杉中 松 辻 西阿 平 和 酒 西 伊 武 早 小 勝 三 土 石 池 新 笹 戸 金 野 津 松 梁 佐 長 酒 岩 不

田部井田田田藤部川倉谷村弁居田岡野田井村秋下見藤尾井柳の田登 志羊十介羊美一維淡水子太平子子栄仏菜生も児子山志心子子楽秋甫花楼堂春鳥平伸夫

光江大本久仲林山野田梅西岡藤城石池桝宮岡山多中橋西岡池前菱小水加飯野中 好国谷多家と 本田中木川野井内坂戸本口沢田田村高尾部上川田浜野納田々島 伊は九薫青三知左 山乃口 陽岡月省代ん 奏立一限宗 の五吾新桃蕗笛凡三な呂風一十恵女満牧水茶文美小 子谷都三男く丘児念子一晃子茶棚雪村児生志男み平子路郎美字秋人茶花夫井石

printed in Japan

B 川 列5 号 麻 毎 月 月一日発行 (送料四円) [0] を記された 第第

円号卷行

『無題吟』 えな離 の投句は不朽洞な融でも投句が出来 雑

近作 柳 柳

文川

究 ・麻北麻 集 郎巢郎

夜熱 小運

題 (廿旬以内 吟 石小 浜川隼

川川二田村 人米雄選 (紀流洞選 短明選 (紀流洞選

募

次

所

Ш

柳

雑

誌

社

# 昼間療法

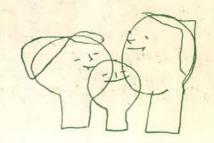
昼間の服用だけで、夜自然に安眠 ができ、日中のイライラや不安感 もとれ、明朗・能率的な生活を送 れる習慣性のない安全な新薬です スッキリした頭で作句の為にも!

書はすつきり。夜はぐつすり



東京·大阪 山之內製薬株式会社 福岡·札幌

### 家そろつてホーライ党



東 料



大阪なんば。TEL @ 551-2

著明そ過的詩型がに作いる。 も絶川 が・は 者快の作 川 るその川地 そ 嘆息 4 + b Jil 日に 路 れ 柳の作り b 至 先生 り、 庶 方と味い方ー 民 は 0

答えている るその川柳がいかにして発生し、それは伝統的であると共に常に革むれた諷刺と諧謔の嘆息・嘆声・嗚咽――そうしたも 味わい る のが本書で 将来に動く 偽らざる声 であ の第一人者たるの第一人者たる であ

送価 ------四円

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

品 葭 本 乃女史の 書 0 は 金字塔です。 JII 柳

0

母

.

生

完 価

一百

異色あ

送費 菊

面

为

ら御好評をいただいて居ります。

各 る 麻

方

半

型

凾 三十 五

入 円

麻

生

郎

何

か

麻

生

葭

乃

著

.

米田三男之介裝幀

行 所 発 雑 誌

大阪市住吉区万代西五の二五 振替口座大阪 75050 番 電話住吉 (67) 6081